第Ⅳ章　遺　　跡

1　遺跡序説

寛政２年（1790）の大和名所図絵は，18世紀末頃の薬師寺伽藍の状況を伝えている。本堂，東塔，東院堂，南門などは昭和37年当時の航空写真などからわかる伽藍復興着手以前の状況とかわりがない。講堂跡では土壇がのこり本堂西方には垣で囲まれた西院弥勒堂を描いている。しかし八幡神社では楼門，郷廊が社殿前庭を囲んでいる。

大正７年（1918）大阪電気軌道株式会社が西大寺・橿原神宮間の軌道敷設の認可をうけ，大正10年西大寺・大和郡山間が開通し，つづいて大正12年に橿原神宮まで開通した。これが，薬師寺伽藍の境内地西端近くを南北に走る現在の近鉄橿原線である。奈良時代の寺域は，この近鉄線を越えて西にある西二坊大路までであった。

薬師寺における発掘調査が継続的に行なわれる以前，昭和40年前後の状況を概観しておこう。境内地は平城京六条二坊十六坪のほぼ全体と十五坪の南３分の１，その南の八幡神社一帯を含めている。僧房や，回廊の東北隅・西北隅の想定位置は水田である。昭和37年当時の地図には東院堂南西位置に接する不整形池，中門西にひょうたん型の池，また金堂北方に方形の池２つがあった。東院堂に接する位置の池は防火用水の貯水槽に利用されているほかは現在いずれも埋めたてられている。講堂と金堂の間には東へ流れる用水路があったが，これは現在は暗渠になっている。金堂・塔の前がオープンスペースとなっていたものの，境内地は全体に木立

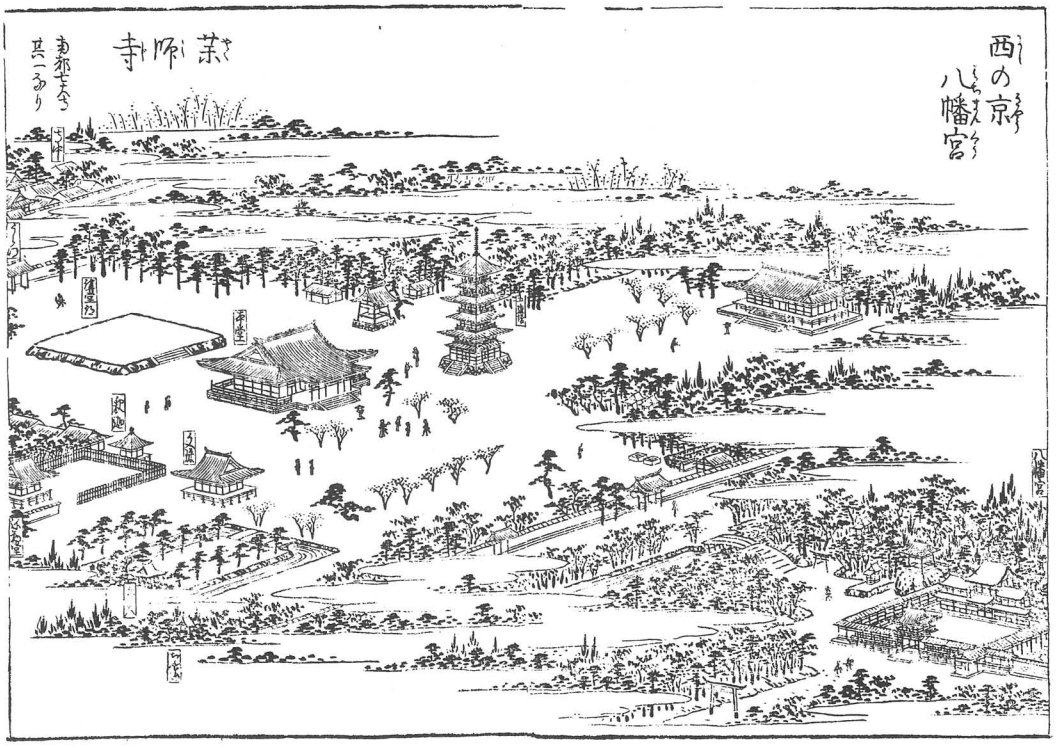


Fig. 5　「大和名所図絵」にみえる薬師寺

で覆われていた。

創建時の薬師寺の建物としては，優美な姿で著名な東塔一基がのこるだけである。境内地には金堂の西南に西塔跡が土壇としてのこり，土壇中央に塔心礎がのこっていた。西塔と東塔は想定伽藍中軸線に対して対称の位置にある。金堂跡には室町時代末期の建物があったけれども，創建時の礎石や敷石がのこっている。大理石の内陣仏壇も当初の姿を保持している。講堂・南大門の旧位置にはそれぞれ後世の建物があり，中門・回廊は地表にその痕跡をのこしていない。西塔跡近辺には重要文化財若宮社社殿や，摩利支天堂，南には仏足石・仏足堂があったが，いずれも中世近世の建物である。東塔の東には鎌倉時代の建物である東院堂があり，それを囲むように南・北と東に土壇状の高まりがある。東院堂の東には溜池観音池がある。境内地から約100mほど隔てて，北方に本坊（地蔵院），養徳院，世尊院，法光院，金蔵院の各子院があり，現在では旧本坊の北に事務所や写経道場がある。平城京六条大路上は，小径と小川が東西に通っている。

金堂・講堂の中心を結ぶ中軸線上には，北へ延びる道路があり，講堂北約370mには寺域北限を画した土塀に開いていた北門の礎石が露出している。東と北では寺域を画した土塀の痕跡はほとんど失ってしまったが，昭和初期までは地蔵院の東に東門と東脇に築地が残っていた。西面では近鉄西ノ京駅の西で，南北に細長い土壇があり，築地の土壇が部分的にのこっている。南面では当初の位置に，南門両脇に築地塀を延長約150mほど築いている。

近年は逐次周辺の水田を境内地に加え，伽藍整備を進めてきている。

Fig. 6　昭和37年当時の薬師寺

2 遺　構

A 南大門・中門・脇門

i 概　要

昭和58年度までに行った南大門・中門周辺の発掘調査は，昭和29年の南大門・中門の調査[1]，昭和53年の南大門基壇に関する立会調査[2]，昭和55年の南大門とその東側の調査[3]，そして昭和57年の中門及び南面東回廊の調査[4]の計4回である。

南大門・中門

昭和29年の調査では，南大門と中門の建物規模及び基壇規模を，礎石位置と基壇外周の壺掘りによって確認した。

その結果，南大門両脇の築垣位置は動いておらず，現在の南大門も当初の南大門と中心が合っていることが判明した。しかし，南大門・中門とも長和4年（1015）に編纂された『薬師寺縁起』（以下『縁起』と略す）の「仏門五間・二重・戸三間・壁二間・長五丈・広三丈二尺・是云南大門」，「中門一口・五間・一蓋・長五丈一尺・広二丈五尺・（後略）」の記載に基いて従来から考えられていた規模とは異なり，桁行がはるかに長い規模であったことが明らかになった。この時の調査では南大門は桁行5間，86尺，梁行2間，32尺，基壇は凝灰岩壇上積で側柱心からの出は四辺とも13尺，中門は桁行5間，81尺，梁行2間，25尺，羽目石と葛石のみの凝灰岩製基壇で，側柱からの出は南・北面9尺，東・西面6尺と考えられた。なお旧地表は現地表下0.7～1.7m下にあって，南大門並びに中門基壇上面は大きくは削りとられずに，旧礎石位置等もほぼこれを推知することができた。なおこの調査は文部省科学研究費の助成をうけて奈良国立文化財研究所の協力のもとに，大岡実・浅野清氏らが担当したもので，当時の調査成果を本報告の付章として再録している。

南大門基壇

昭和53年の立会調査は，奈良市水道局の水道管敷設工事に伴うものである。水道管の敷設掘形は幅0.7m・深さ1.4m，位置は現南門南側の道路沿いで，旧南大門南側柱列のすぐ北側を東西に横断する。この掘形の土層断面の観察によって基壇の東西両端延石を確認するとともに，基壇構造を把握した。基壇には掘込地業はなく，現地表面下約1.6mの青灰色粘土の上に，砂質土と粘質土とを積み重ねた基壇築成土が約1.35m残存していたが，明確な版築とはいい難いものであった。基壇東西端に残存する延石は幅約41cm，東西延石外面間距離は約34.3mであった。また南側柱列中央間西方の礎石抜取穴（幅約1.7m）を検出した。

南　大　門

これに続く南大門の調査は昭和55年に行われた現南門両脇の築地整備工事と，売札所の移転に伴うものである。調査面積は約114m²，調査期間は1月21日から2月23日までと小規模ではあったが，昭和29年の調査時には未確認であった築地直下の南大門礎石位置を確認し，南大門のすぐ東の地域の様相をも把握できた。その結果，昭和29年に得た南大門の桁行柱間寸法を再度確認するとともに，現南門の親柱の礎石一対は，南大門の中央間の礎石をそのまま再用し，

1）浅野清・福山敏男他「薬師寺南大門及び中門の発掘」（『日本建築学会論文集50，1955）。本報告付章を参照のこと。

2）平城宮『概報』昭和52年度 p.44。

3）平城宮『概報』昭和55年度 p.60—62。

4）平城宮『概報』昭和57年度 p.65—72。『年表1983』p.

両者の東西の外縁を打ち欠いて使用していることが判明した。基壇の築成は，昭和52年の調査時には版築工法とは断定できなかったが，この調査によって厚さ５～10cm の砂質土と粘土質とが互層をなす比較的粗雑な版築であることが判明した。礎石の据え付け方法は，現存礎石及び中央桁通り東から１・２番目の礎石抜取り穴では，据え付けのための掘形を掘削せず，基壇版築途上に根石で礎石を安定させ，さらに基壇版築を続行する工法をとっている。なお築土中には若干量の平城京薬師寺の創建瓦が含まれており，南大門の創建が薬師寺造営に着手した当初よりも若干遅れることを示唆している。また南大門と中門との間の東側の区域では，地表面下約2.7m で砂質の地山に達し，この上に厚さ20cm の植物質を含有する池状の堆積，薬師寺創建に伴う厚さ60cm の盛土層があり，薬師寺造営以前にこの区域が池沼を形成していたことを示している。この盛土層を掘り込んで大量の瓦塼類の堆積層があり，それを覆う厚さ30cm の整地層の上に天禄４年（973）の火災に伴う焼土層が存在する。従って，天禄の火災以前に，大掛りな屋根茸替工事をともなう建物の修造が行われたことを示すものと考えられた。

中門の調査　昭和57年の調査は，中門の建物復原に先行するもので，昭和29年の調査が基壇外周と礎石位置の部分的な調査であったのに対し，中門全域と南面東回廊の一部を含む計 670m² の全面的な発掘調査であった。調査期間は８月23日から10月４日までである。この調査の結果，建物規模，基壇規模及びその構造，基壇外装等が一層詳細に判明した。とりわけ『縁起』に記す計16躰の仏像の安置場所を推定し得た。しかも，このうち創建当初の二王像が塑像であったことをほぼ確定づけたことは，特筆に価するであろう。

ii　南　大　門（PL. 50・51，PLAN. 20）

基　　壇　南大門基壇の遺構面は，海抜高が約 60.00～61.10m で，現南門親柱の礎石上端から約 0.5m 下方にある。残存していた基壇積土は，西側で約 1.2m，東側で約 0.8m である。礎石は，現南門親柱の礎石が創建当初の位置のまま残存している以外はすべて抜取られている。しかし中央柱通りの西から２番目と，南側柱の東から２番目を除く，すべての礎石抜取り穴及び根石群を検出し，南大門の建物規模を確認することができた。礎石抜取り穴は，基壇上面が若干削平をうけているため，一様に約 20cm の浅いくぼみで，内部に径 20～30cm の根石が３～４個存在する。また，中央柱通り中央間の一対の礎石は新たに据え直した痕跡はなく，創建南大門の礎石が原位置のままで，西の礎石は西側を，東の礎石は東側を若干打ち欠いて，現南門親柱の礎石として再使用している。これによって南大門の建物平面規模は，桁行 25.46m，梁行 9.47m で，桁行５間，梁行２間に復原できる。寸法は造営単位尺を１尺あたり 0.296m とした場合，桁行総間86尺で中央３間が各18尺，両端間が各16尺，梁行総間32尺で16尺等間となる。この柱間寸法のうち，桁行方向については，『縁起』に記す「仏門五間。二重。戸三間。壁二間。長五丈。広三丈二尺。是云南大門。」の桁行規模とは大きく相異し，はるかに大きな規模をもっていたことが明らかとなった。基壇は掘込地業等は行わず青灰色粘土の地山面の直上に築成している。

南大門基壇の積土は，先に述べた如く，0.8～1.2m 残存していたが，築成状況は厚さ５～10cm の砂質土と粘質土を交互に積重ねた版築工法である。後述するが，中門基壇のように根固めの特殊な仕事は南大門では認められない。礎石の据付け方法は，現存礎石と中央柱通りの東から１・２番目の抜取り穴の土層断面観察の結果，据付けのための掘形を掘削せず，基壇版

築を築成途上に根石を安定させ，さらに基壇版築を続行する工法をとっている。基壇外の埋土層は北面では 15cm 程の遺物包含層（砂層），30cm 程の瓦片を含んだ粘土層と固くしまった粘質土層（瓦片含む）が堆積していた。南辺では薄く焼土層が堆積するほかは，北辺と似た埋土状況を示していた。

基壇外装

基壇外装は，延石・地覆石・束石が遺存し，壇上積基壇であったことが判明した。

延　石

延石は計41本を検出し，形状は長さ 95～107cm，幅 43～46cm，厚さ 17～19cm である。一様に上面前角の風触が著しく，地覆石と重なる部分と，地中に据付けられた部分は，風触を免れている。この風触差から，地覆石前面から延石の見え掛り幅は約 36cm（1.2尺），見付け高さは約 11cm と考えられる（Fig. 7）。延石上端の海抜高は約 60.050m で，従って創建当初の南大門四周の地盤高はおよそ59.94 m となる。ただし延石の外側には，享禄 1 年（1528）の火災[5]に伴う焼土，瓦片の堆積層が認められ，この火災以後延石は埋ったものと推定される。

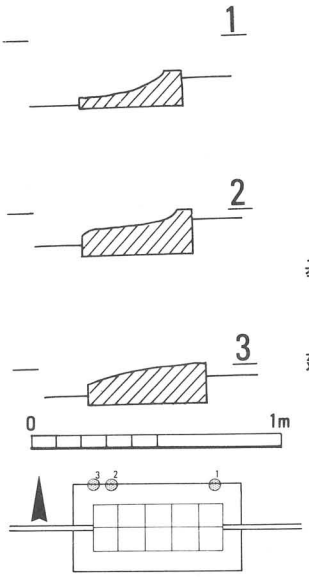


Fig. 7 南大門基壇延石断面図

地覆石

地覆石は計 5 ヶ所で検出した。とりわけ基壇の東西側面中央部，築垣との取付き箇所では，延石・地覆石・束石が一体となって遺存していた。地覆石の長さは確認していないが，幅約 42cm（1.4尺），丈 29～29.7cm（1 尺）で前面上角は成 4.5～6.5cm，幅約 5.5cm 欠込んで面を施す。上面後角も丈 4.5～7.1cm，幅 9.5～12.0cm 欠込み，羽目石との相欠き仕口をつくる（Fig. 8）。

束石は幅 39～42cm，厚さ 15～18cm，高さ 73～81cm。側面後方を欠込んで羽目石を納める。束石見付厚さは約 12cm（4 寸）で羽目石は全く残存しないが，束石側面の羽目石欠込みから地覆石後角までを羽目石の厚さとすると 21～23cm 程になる。なお，地覆石前面から羽目石前面まで 19～21cm，束石前面まで 7～9cm である（Fig. 8）。

葛石は全く遺存しないが，基壇の東側面中央部では，束石の上方に葛石らしい凝灰岩の崩壊したものが認められた。

これらの基壇外装のうち，葛石と地覆石が前面を揃えるとすれば，地覆石の外面間距離が基壇規模を示すことになる。東西の地覆石外面間の寸法は 33.62m（113.5尺）。南北の延石外面間は 18.04m（61尺）であるから，地覆石外面間は延石見掛りは幅 36cm の 2 倍を

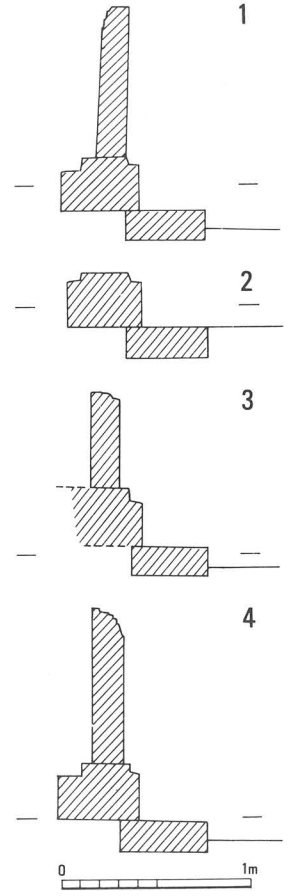


Fig. 8 南大門基壇延石・地覆石・束石断面図

5）この年号は『薬師寺志』による。ただし，『薬師寺縁起国史』の「旧記」には享禄 2（1529）年と記し両者は相異を示すが，足立康「薬師寺西塔焼失年代に関する誤謬」（『考古学雑誌』21—1，22—1，1931，1932）や，福山敏男・久野建『薬師寺』（東大出版会，1955）は享禄 1 年が正しいことを指摘し，『奈良六大寺大観（薬師寺）』もこの説を指示している。

差引いて 17.32m（58.4尺）となる。従って柱間寸法を差引けば，側柱心からの基壇の出は，平側 3.925m（13.3尺），妻側 4.080m（13.8尺）となり，両者は若干の相異を示す。

石　　階　石階は基壇の南・北面の桁行中央3間にとりつく。すなわち，石階幅は延石外面間で 17.32m＝58.4尺（29.65cm/1尺）であるから地覆石側面からの延石の出を1.2尺とすれば，地覆石外面で石階幅は56尺となり，耳石中心を南大門中央3間分，54尺の柱筋に合わせたものとすることができる。また，石階両側の延石は，基壇外周の延石と同規格で，基壇延石と石階前面の延石との中間に挟まれている。基壇延石は石階内部には引通さず，石階側面延石からやや内側で止めている。南面石階の西入隅部では基壇延石の端部上面に，前方に寄せて 39cm 四方で深さ 3mm 程のごく浅い欠込みがある。その西端は石階延石の内面に揃っており，石階地覆石を納めたときの仕事と思われる。北面石階部の基壇延石石にはこのような欠込みはない。従って石階の築成及び外装は，基壇と同一工程で行われたことになる。

石階の出　石階の出はおおむね5尺に復原できる。石階前面の延石は，北面では摩耗が著しく，東北隅部には石階側面の延石に接して小さく残存するのみで，南面では西南隅部の延石が遺存良好である。長さは確認できなかったが，幅は約 40cm で，基壇延石とほぼ同幅である。石階前面の延石と側面延石との接合部外縁の風化が著しく，この部分が南面石階の西南隅であることを示す。この石階前面の延石と，基壇延石の外面間距離は，北面石階で約 1.37m（4.6尺），南面石階で約 1.48m（5尺）である。従って石階前面延石と第一段石との重なりを，基壇延石と地覆石との関係と同様に約 6cm（2寸）程度と考えると，石階の出は概ね5尺となる。段石は全く残存しないが，おそらく4段で，葛石を含めて5段，段石の踏面は約 0.37m（1.25尺）に復原できる。また，地覆石の高さは約 0.296m（1尺）であるから，段石の蹴上げ及び葛石の高さをすべて 0.296m（1尺）と想定すれば，延石上面からの基壇の高さは 1.48m（5尺）となる。この復原基壇高と延石上面の海抜高約 60.05m との和，すなわち約 61.53m が葛石上端の推定復原海抜高となる。現存礎石上端の海抜高は約 61.60m で基壇上面からの礎石の見付け高さを約 7cm と想定すると，平側基壇における水垂れ勾配は約0.3%という適度な値を得る（Fig. 9）。

裏 込 め　石階の裏込め土は，北面では瓦片を多く含む粘土層で一様に北方に下り，石階前面では延石の抜取り跡を裏込め土の下端部で認めた。伽藍中軸線上では上部二段目と三段目に当る位置に段石が残っているが，創建時のものとしては低すぎ，改造後の段石と思われる。

裏込め土の下層には玉石列がある。この玉石列は基壇地覆石前面を引通した線の北方約 60cm の位置に並行し，中央間の分だけ残り，東方へは続かない。玉石の上端は延石上面より 15cm 程高い。このような状況から，玉石列は二次的なものではなく，地覆石との位置関係からみると金堂の地覆と犬走り葛石に類似しているが，現状では意味不明のものである。

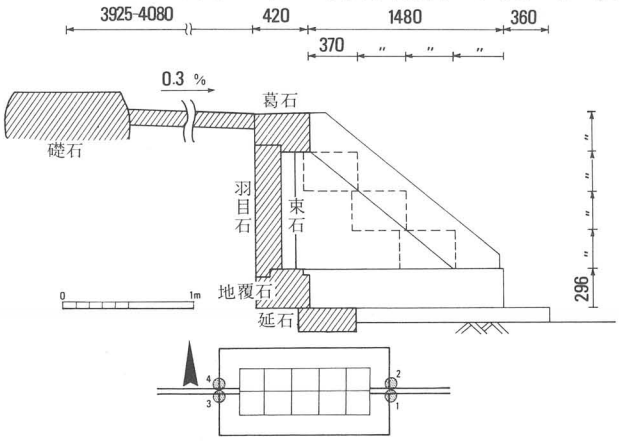


Fig. 9　南大門復原基壇断面図

足 場 穴　東南隅トレンチには基壇延石列の南方約 2m に，一辺約 1m，深さ約 40cm の

掘立柱掘形を検出した。掘形内には瓦片を多く含み，瓦型式から推して奈良時代の遺構である。また，南大門基壇との位置関係からみると，この掘立柱穴は南大門建立時の足場の柱穴と思われる。

築　　垣

基壇の東と西の側面で現築垣際に残る束石・地覆石・延石は，それぞれの重なり具合をみると上方ほど築垣寄りにせり出して据えられている。

これらの延石や地覆石の築垣寄りの先端から少し外側にもどったあたりを境にして土質が変わり，築垣側は粘土層で，外側は汚れた土層である。粘土層は版築状の層位を明瞭に示さないが，基壇西側では布石上面から 90cm 程の高さまで残存し，創建時の築垣築土と認められる。また，延石や地覆石の木口には風触がなく角が明瞭であり，束石の築垣寄り側面も荒仕上げのままであることなども，布石・地覆石・束石の一端は築土内に納まり，築地側面の傾斜に応じて，それぞれ築地心側にせり出して重なった状況を示していることがわかる。

基壇の東と西の側面中央部の築垣が取付く部分で，南北の束石・地覆石・延石が切れる部分の南北間隔を求めると Tab. 2 のようになる。

Tab. 2　築垣細部計測表

計測位置	基壇西側	基壇東側
束　石	1.89m=6.39尺	
地覆石	1.96m=6.62尺	2.02m=6.82尺
延　石	2.08m=7.03尺	2.27m=7.67尺

（1尺=0.296m）

築垣の復原

また，延石木口から束石外面までの入り込み間隔は西北 24cm，西南 41cm，東南 22.4cm である。束石の築垣壁面からの出が等しく，束石が前後対称に立つと考え，束石外面から延石木口までを，最も狭い東南に合わせて Tab. 2 の西南延石間実側値を補正すると，2.28m（7.72尺，1尺は 0.296m）となって，東面布石間とほぼ等しくなる。実際には布石先端も多少は築土内に突込んでいたと考えられるから，延石上面での築地基底幅の計画寸法は 8 尺に復原できる。

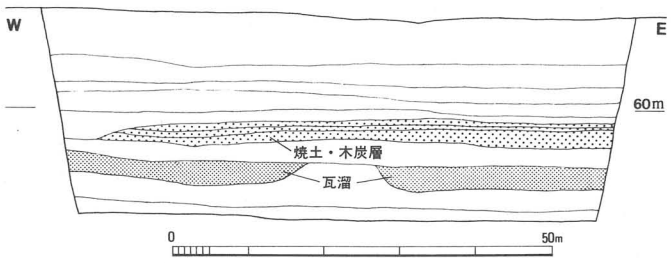


Fig. 10　薬師寺南門東土層図

iii　中　　門 (PL. 52～57, PLAN. 19)

中門基壇上面の遺存の良好な箇所で，遺構面は現地表下約 45cm にあり，雨落溝等の基壇外編部で現地表下約 1.1～1.2m にある。従って残存していた基壇土の厚さは約 50～80cm である。礎石はすべて抜取られていて，各々の礎石抜取り穴の中に 2～3 個の根石を検出した。

これらの礎石抜取り穴から明らかとなった中門の建物規模は，東西 23.98m (81尺)，南北 7.4m (25尺) で，桁行 5 間，梁行 2 間に復原できる。柱間寸法は，造営単位尺を 0.296m/1 尺とした場合，桁行中央 3 間が17尺等間，両端間が15尺，梁行が12.5尺等間である。このうち桁行寸

法は，『縁起』に記載のある「長五丈一尺」と大きく相異する。

基　　壇　基壇は西端妻柱通りの礎石抜取り穴列以西が現代の池によって大幅な攪乱をうけ，後述するように外装の凝灰岩も積み替えの形跡が著しい。しかし，その平面規模は東西 27.53 m（93尺），南北 13.32 m（45尺）に復原できる。従って，建物規模を差引けば側柱心からの基壇の出は平側10尺，妻側 6 尺となる。このうち，平側の基壇の出は，昭和29年の調査では 9 尺と考えられていたが，昭和52年の調査で10尺と見られることが確定した。

築成状況　また，断割り調査によって基壇の築成状況を把握した結果，基壇は全域に及ぶ掘込み地業を行わず，整地した地表面の直上にやや不規則な版築工法によって築成していることが判明した。とりわけ築成途上で，礎石据付け位置にあたる部分を広範囲にわたって掘削し，ここに大量の瓦で根固めを行っている。すなわち，伽藍造営に先行して砂質の地山面上に厚さ約30～40 cm の盛土整地を行い，この上に第一段階として基壇土を約 40cm の高さまで版築工法によって築成する。この上面で礎石据付け位置にあたる部分に直径約 2～3 m，深さがもとの整地面の下層にまで及ぶ大規模な掘形をうがち，大量の破砕瓦で根固めを行うと同時に版築工法によってつき固める。根固めの瓦は主として平瓦で，そのうちの軒平瓦の大半は本薬師寺式である。いづれも扁平に敷きつめ，一層あたりの厚さは約 3～5cm で粘質土と同程度の厚さの瓦を互層に積む。この根固めの掘形内部を第一次版築層の上面までつき固めた後，更に基壇全域にわたって厚さ約 40cm の版築工法を施す。そしてこの第二次版築層の上面に礎石据付け穴を掘削し，根石を据えている。これらの工程は複雑ではあるが一連のものと考えられ，後世の修復によるものではない[6]。従って『縁起』に記す「長五丈一尺」という桁行寸法が，どのような意味をもつのかはなお不明であるが，天禄 4 年（973）の火災を介して，その前後の時期に基壇及び建物の拡張や縮小が行われず，前述の基壇及び建物規模が創建以来享禄 1 年（1528）の放火によって焼失するまで踏襲されつづけたと見るのが妥当である。

基壇外装　基壇の凝灰岩外装は，北面では一部遺存するのみであるが，南面は比較的残りが良好である。しかし，それらの大半は石の規格，積み方がともに不揃いで，後世に積み替えた可能性が高い。おそらく一部後補のものを含みながら，創建当初の石材を再使用しているのであろう（Fig. 4）。

再使用の石材としては，基壇南面西寄りで，長さ 4.8 m にわたって南側に転倒した凝灰岩製羽目石列の上にずり落ちたと考えられる凝灰岩製葛石列がある。羽目石は各石とも摩耗が甚しく，当初の形状を復原することは不可能である。葛石は西寄りに 3 石が遺存し，長さ 80～90cm，幅 24cm，厚さは約 12cm である。

また東北入隅部分には南北に並ぶ長さ 55～65cm，幅 30 cm，厚さ 15cm の地覆石 2 石がある。この 2 石には，やや不整形な面取と，上面には羽目石のあたりと考えられる凹凸がある（Fig. 11）。

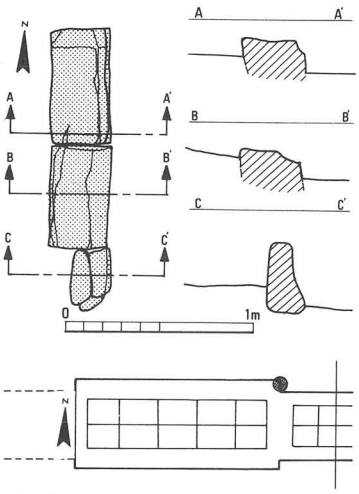


Fig. 11　中門東北入隅部基壇外装平面・断面図

6）第一次版築層と考えた積土は，単廊建設計画があったことを考慮すると，単廊による伽藍計画に伴う時期の中門基壇の可能性があることを否定できない。

その他，遺存の比較的良好な南面でも，葛石・羽目石・地覆石が完全に遺存する箇所はなく，大半は地覆石を用いず，葛石も欠失し，羽目石の並びのみ残存していた。とりわけ基壇東南入隅部の凝灰岩製羽目石のうち，北側のものには幅 9.9cm，深さ 4.2cm，南側のものには幅約 4.5cm，深さ 3.3cm の仕口がそれぞれ認められ，明らかに転用材であることを示す。同時にこれらの裏込めは凝灰岩の破片や瓦片を含む暗灰褐色砂質土で，焼土を混じている。『縁起』によれば，天禄4年（973）の火災によって東西両塔及び金堂を除く伽藍の大半が焼失したことが知られ，この裏込めに混じた焼土をこの火災に伴うものと考えるならば，基壇回りの凝灰岩外装の大半は火災後の再建時に積み替えている。創建当初から動いていないと認められる基壇外装石は，南面の東から2列目の柱筋に存在する4個の凝灰岩列である（Fig. 6）。この石列の裏込めは均一な黄灰色砂質土で，焼土などの混入も認められない。またこれらの凝灰岩の前面上角には，風化してはいるものの，幅 6cm，高さ 6cm の面取が認められ，地覆石と羽目石とを一石から造り出したものであった。

基壇北面中央部や，基壇南面西端部の断面土層には，創建当初の地覆・羽目石の据付け痕跡を認め，これらの底面の高さは一様に海抜 59.950m で，上記の4個の凝灰岩列の底面の海抜高と一致する。

石階

石階の痕跡は南面のみ確認し，北面では近年の攪乱が著しく確認し得なかった。また回廊との取付き部には，後述するように石階は存在しないことが判明した。南面の石階の痕跡として，長さ 5m にわたって，幅約 27cm，厚さ 5cm の板状の凝灰岩列を検出した。これは先述の創建当初の中門の地覆・羽目石列に対応し，創建時の石階一段目の地覆石の底部が遺存したものと考えられる。遺存箇所は中央間と東から2列目の柱筋で，創建当初は中央3間であったと考えられる。この石階最下段石は当初はもっと厚く，その上面は中門，羽目石の地覆造り出しと高さが揃っていたものと考えられる。しかし石階を改作した際に，地盤面より上が削平され，基底部のみが厚さ 5cm の板状に遺存したのであろう。従ってこの板状の凝灰岩列の上面の海抜高が 60.050m であるから，創建当初の中門基壇南面の地盤高もおよそこれと同程度に復原しうる。この地盤高は中門の地覆・羽目石の底面の海抜高（59.950m）とも適切な関係にあり，南大門四周の推定復原地盤高（59.94m）から導き出される中門から南大門に至る雨水排水勾配1％も適切な値である。この石階地覆石列の北縁は中門の地覆・羽目石列南縁から南へ 55～60cm の位置にあり，踏面を 27cm とすれば石階踏石は2段，葛石と石階地覆石も含めるならば計4級に復原できる。

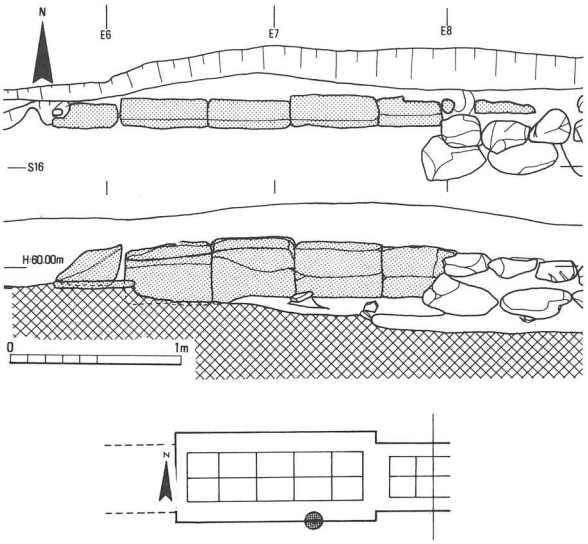


Fig. 12　中門南面基壇外装平面・立面図

石階の復原

また，最も遺存の良好な中門基壇積土上面の海抜高は 60.65m～60.70m であるが，後世の削平を考慮し，基壇上面の敷石を厚 12cm と想定すれば，基壇上面の推定復原海抜高は 60.81m となる。従って中門南面中央の推定復原地盤高 60.05m との差，約 76cm が基壇高となり，4段の石階の蹴上げは葛石，踏石ともに約 21cm となる。

以上のように創建当初は中門の中央3間の前面に凝灰岩製の踏面約27cm，蹴上げ約21cmの石階が取付いていたと考えられる（Fig. 13）。

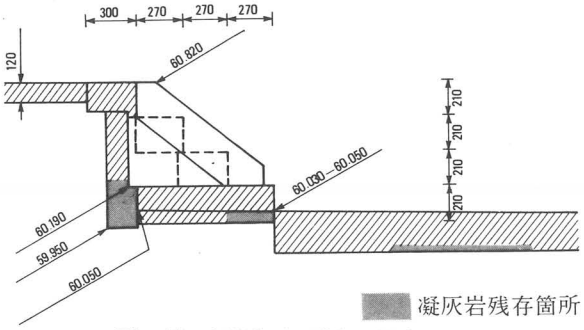


Fig. 13　中門南面石階復原模式図

この創建当初の石階地覆石の南約 1.3 m の位置には，石階の東西幅員に呼応して，薄い凝灰岩の敷石遺構が存在する。遺存状況はかなり不良で，推定復原地盤高より20cm程低い位置に存在する。おそらく南大門から中門にかけての舗装敷石の底部が遺存したものであろう。

石階の改装　凝灰岩製の石階は後に玉石積石階に改装される。基壇南面中央に中央柱間と幅を揃えて玉石踏石と凝灰岩耳石をもつ石階の痕跡を確認した。踏石は直径20～30cmの野面石で，第1段は段石が数個体欠失するが良く残存し，第2段は東端部に3個体残るだけで他は攪乱されて残らない。両端部耳石は幅・厚とも10～20cm，長さ56～73cmの角棒状の凝灰岩切石を積重ねたものと思われる。

基壇羽目石前面からの石階の出は約1.0m，石階幅は耳石外面間で5.1m（17尺）であるが，両耳石とも中門桁行中央間の柱筋から東に30cm程ずれている。踏石の踏面幅からみて基壇葛石を含めて5段と考えられるが，蹴上げについては1段目と2段目との差が小さく，2段目の石が沈下したか，または最下段の蹴上げを低くしていたものと思われる。

以上のように中門南面の石階は2時期にわけられる。第1期は石階層幅3間，踏面約27cm，蹴上げ約21cmの4級の凝灰岩切石製，第2期は石階を中央柱間1間に縮めて，径20～30cmの玉石で，5段の石階に改め，両脇に凝灰岩耳石を設けている。

また，北面の石階は攪乱のため顕著な遺構を検出し得なかったが，創建当初はおそらく南面と同様に中央3間分に4級の石階が取付いていたと考えられる。それは，基壇北面中央部の断面土層で確認した創建当初の中門地覆・羽目石の据え付け痕跡の海抜高が南面と同様に59.950mであり，中門の南面と北面はほぼ同一の海抜高，すなわち60.05mに推定復原し得るからである。金堂南面の遺構面高は約60.20mで，金堂，中門間は南へ約1.0%の勾配で下っていることになり，雨水排水の勾配として適切であることもその傍証となる。

二王像台石　中門の前面両端間のほぼ中央部には礎石様の花崗岩2対がある。西の2対は基壇上面の削平のために石の上面が露出しているが，東の2石は厚さ約10cmの基壇土に覆われている。各石はすべて上面が平らで，平面の大きさは西北のものが最も大きく，直径約110cm，その他の3石は同程度の大きさで，長径80～90cm，短径約70cm，形状はすべて不整円形である。東の2石を断割り調査によって確認した結果，石の厚さは約70cmで，底面に径30～40cmの根石が数個存在する。明確な石の据付け痕跡が認められないため，基壇築成と併行して据えつけられたと考えられる。これらの石の上面の海抜高は，凡そ60.50mで，先にふれた基壇上面の推定復原高60.81mより30cm以上低い位置に存在する。従って基壇上面の敷石の厚さを12cmとすれば，これらの石を更に厚さ約20cmの基壇土が覆っていたことになる。

4石の上面の中央には，それぞれ径約25cm，深さ約30cmの円形の枘穴がうがたれ，これらの枘穴の中からは焼土とともに約200点の塑像の断片が出土した。この焼土を混じる埋土は，石を覆う基壇土の上面にまで同径で達する。おそらく枘穴にはめこまれた柱状の木材が火災に

よって焼失したため内部が中空となり，焼土及び塑像の破砕片が混入したのであろう（Fig. 14）。

凝灰岩石列

また同じく中門前面両端間に，この2対の石をL字形にとり囲む幅約90cmの凝灰岩縁石列がある。この石列は基底部が部分的に残存し，縁石の摩滅のため一部では縁石据付け痕跡の内部に粉末状の凝灰岩が堆積するなど遺存状況はそれほど良好でない。各石の厚さは一様に約10cmであるが，幅は10～30cm，長さ30～70cmと不揃いである。とりわけ東の縁石列の南端部には方30cmの束石の基底部をおもわせる凝灰岩がある。これらの縁石の底面の海抜高は凡そ60.25mで，かなり低い位置に存在するが，基壇土上面から切り込む幅約120cmの据付け掘形をもち，基壇築成完了後に改めて敷設されたことを示す。縁石列の外縁が柱通りよりやや内側に位置するため，おそらく中門の建物構造や壁などの造作とは直接関係のない仏壇状施設の基底部のみが遺存したものと考えられる。『縁起』には「南面左右立二王像幷夜叉形天及座鬼形等今十六躰」と記し，中門に二王像をはじめ計16躰の仏像が安置されていたことが知られ，この2対の石とL字形の凝灰岩列は，前者が二王像各足の台石，後者がそれ以外の仏像の安置されていた仏壇と推定される。そして台石の枘穴から出土した焼土と多数の塑像の断片を考慮すれば，『縁起』に記す天禄4（973）年の火災焼失以前の二王像等は塑像であったことがほぼ確実となった。

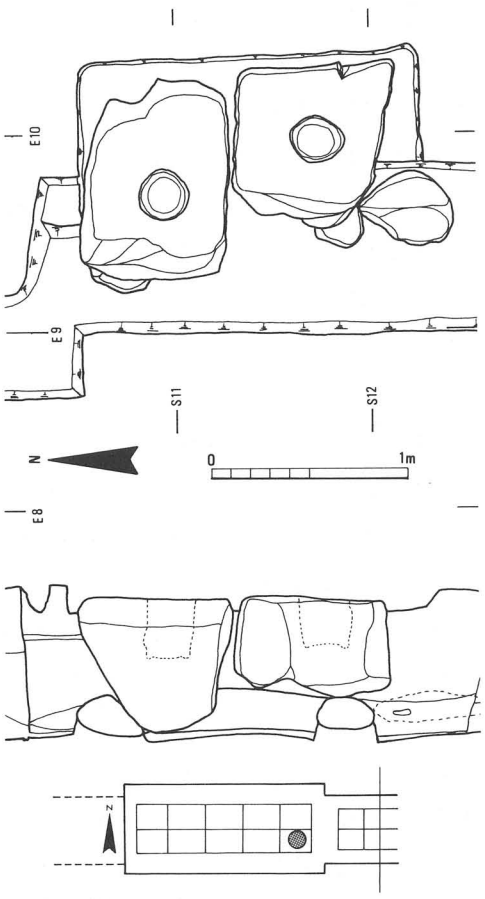


Fig. 14　二王像（東）台石平面・断面図

また，東西の台座縁石列北縁の引通し線は伽藍中軸線に対して西で南に0°39′58″偏しており，中門南面に遺存する創建当初の地覆・羽目石列と，基壇の西端及び中央部断面土層で確認した地覆・羽目石据付け痕跡の引通し線の振れと一致する。従ってこの数値を中門の基壇及び建物の振れとして理解することが可能である。

雨　落　溝

中門及び回廊の南面には，雨落溝と考えられる玉石列及び凝灰岩列が重複し，加えてある時期の洪水を示す厚い砂層や，天禄4年（973）の火災を示す焼土層が堆積するなど，複雑な様相を呈する。天禄4年の火災を介して，南面雨落溝はおおむね2時期に分けることができる。

創建当初の状況を想定させる遺構は検出できなかったが，地覆・羽目石列・石階との関係から考えて，創建時には南面雨落溝は存在しなかったと考えられる。その後，径30～40cmの上面の平らな玉石と長さ40～50cm，幅20cm，厚さ5～10cmの板状の凝灰岩を底石とする雨落溝を敷設するが，基壇外装の下層にまで及ぶ幅約1.5m，厚さ40cmのすり鉢状の厚い砂の堆積層が示すように，ある時期に大規模な洪水の影響を受けている。これにより雨落溝は底石を残して破壊され，基壇外装の大半も倒壊したと考えられる。この砂層の直上には厚さ10cmの焼土層があり，天禄4年（973）に中門が火災によって焼失したのはこの大洪水の直後であった。検出した凝灰岩基壇外装の大半は，この後の復興時に積替えたものである。

再建後の南面雨落溝は幅約 1m で，基壇裾部を犬走り状に径 10～20cm 大の玉石列で補強し，南岸は径 30～40cm 大の玉石で護岸している。しかしこの溝は雨落溝としては不相応なほど広く，この地域の基幹排水路の機能をもあわせたものと考えられる。

北面雨落溝は，部分的に玉石の抜取り痕跡が残存するのみで，大半は素掘り溝である。

また中門北面のやや西寄りの雨落溝北側には径約 20cm 大の玉石敷がある。昭和51年の調査でも西塔の基壇四周に同様の玉石敷を検出しており，中門の北面にも帯状の玉石敷舗装がなされていたものと考えられる。

南面回廊　中門との取付き部における南面西回廊は，近代の池ですべて削平されているが，南面東回廊を示す遺構には，礎石，礎石抜取り穴，及び基壇地覆石列，南北両雨落溝等がある。

南面東回廊の建物，基壇規模は，桁行12～13尺，梁行２間，10尺等間の複廊で，基壇の幅員が33尺，従って基壇の出は6.5尺に復原できる。このうち桁行方向の柱間寸法は，中門取付き部では12尺二間，それ以外の箇所では13.5尺と寸法に相異がある。おそらく中門の両脇において柱間寸法の調整を行ったものと考えられる。

基壇外装　遺存していた基壇外装はすべて凝灰岩製の地覆石列で，全体的に摩耗が著しいうえに，一部前面に転倒しているものもある。大きさはやや不揃いで，長さ約 45～60cm，幅 18～21cm，高さ 18～30cm，とりわけ中門との取付き部南面入隅部には明確な造り出しを持つ長さ 80cm，幅 20cm，高さ 18cm の地覆石がある。造り出しの断面は凸字形で，前面上角は幅約 5cm，高さ 6cm 欠込んで面を施し，背面は幅 12cm，高さ 2cm 欠取って羽目石との相欠き仕口となる。この背面の造り出しの上面は，中門南面東から２間目に遺存する創建時の地覆・羽目石の面取り部と面をそろえるので，創建当初の回廊地覆石と考えられる。中門では地覆石と羽目石とを一石から造るのに対し，中門脇の回廊ではそれぞれ別の石材を用いていたことを示す。中門脇以外の回廊地区の発掘調査では，回廊の基壇外装には地覆石がない。回廊は中門に向って基壇を高めていて，中門脇では地覆石を備えた基壇外装であったのであろう。

この地覆石の更に前面には，転倒した状況で長辺 95cm，短辺 70cm，厚さ 20cm の羽目石風の凝灰岩が残存する。この石の厚さと地覆石の造り出しの幅（12cm）とは相違し，２石を復原した場合の天端の海抜高は，中門基壇の推定復原海抜高よりも高くなるため地覆石の上に置いた羽目石ではないと考えられる。

取付き　回廊基壇は中門基壇に対して登り勾配で取付くことが判明した。その理由として，まず第一に両者の取付き部の断面土層観察の結果，両基壇の間に明確な高低差が認められないことが挙げられる。中門と回廊の基壇外装も一体のものであり，中門葛石が回廊を横断するように基壇の東辺を設定していたような痕跡も認められない。ただ中門，南面東回廊取付き部の南面入隅部では，中門の北端羽目石が基壇内部へさらにくい込む様相があり，天禄４年（973）の火災以降に基壇を修復したことを示すのであろう。

第２の理由として，回廊の地覆石列が中門との取付き部から回廊の２間目に至る区間で，東に向って1.6～2.0%の勾配で下っていることが挙げられる。

第３には，中門から数えて２間目の回廊の礎石抜取り穴が一様に約 50cm の深さをもつのに比して，第１間目の礎石抜取り穴が削平をうけて基底部が遺存するのみであることなどが指摘できる。同時に南面東回廊西南端の柱位置では，根石とその東の土壙に落しこまれた厚さ 65cm の礎石を検出したが，礎石を旧状に復原すると，中門基壇の復原高よりやや低い位置に相

当することも，その傍証となろう。

なお，この礎石から回廊の柱径をおよそ30cmに復原することが可能である。

以上の3点から，複廊基壇は中門の両脇2間において登り勾配で中門基壇に取付いており，基壇外装の手法こそ相違するものの，両基壇は一体的に築成されていることが明らかとなった。

ちなみに中門から数えて2間目の礎石位置における南面東回廊基壇上面の推定復原海抜高は60.01mとなり，従って中門基壇へのとりつきは約3.6%の登り勾配となる。

雨落溝

北面雨落溝は，最近の攪乱のため明確な痕跡が認められない。

南面雨落溝の変遷は，ほぼ中門での天禄焼失以降と呼応している。すなわち創建当初存在しなかった南面雨落溝は，天禄4年（973）に相前後して発生した洪水及び火災の後に玉石列で敷設されていることが判明した。しかし，中門のように創建後，水害にみまわれるまでの期間に雨落溝の存在した時期があったかどうかは不明である。検出した南面雨落溝の遺構は，粘質土の整地層に敷設された径約30cmの南岸玉石列で，一部欠失している。この整地層の下層には，天禄4年（973）の火災を示す焼土の堆積があり，その直下には地覆石列下層に及ぶ厚さ40cmの砂の堆積層がある。石底の砂層がえぐられて地覆石列は一部南に転倒しており，中門南面と同様に火災焼失直前に，この付近が大規模な水害の影響をうけたことを示す。

火災後に敷設された雨落溝の上層は，凹凸の激しい厚さ30～50cmの砂で覆われており，再び洪水によって基壇の大半と雨落溝の一部が破壊されたことを示す。その後は基壇は構築されなかったと考えられるが，回廊礎石はなお遺存していたであろう。回廊礎石が抜きとられた時期を示す出土遺物はない。

新しい東西溝

南面雨落溝の北約1mの位置にもうひとつの東西溝がある。この溝は幅約50cm，北岸が直方体の凝灰岩列，南岸は玉石列で，時期的に最も新しい。単廊で計画されて建設にとりかかり途中で複廊に変更して完成したという，回廊地区の発掘調査の所見とこの東西溝とは全く関係がない。この東西溝の北岸と回廊中軸との距離が12尺に相当することから，基壇幅24尺の単廊の存在の可能性が指摘されてきたが[7]，これに伴う北側の雨落溝は検出していないし，複廊を後に単廊に変更したことを裏付ける礎石及びその抜取り痕跡等も，これまでの回廊地区の調査では確認していないし，同様の溝は検出していない。この溝は複廊回廊の礎石にほぼ接しているため，最終期の回廊に伴う雨落溝と考えることも困難である。回廊の建物が失われ，基壇も破壊された後，土塁状に遺存した基壇痕跡の南面に敷設された排水溝と考えるのが妥当であろう。

小建物

主要建物とは関係のない礎石2個と礎石抜取穴1個が，南面東回廊の基壇積土上に南北に並んで存在する。北端と南端は礎石がのこり，径約40～50cmの上面の平らな不整形な自然石である。北端の礎石の厚さは約25cmである。中央部の礎石抜取り穴は径60cm，深さ10cmの円形で，間隔は北から2.4m（8尺），3m（10尺）である。回廊が廃絶し，礎石が抜取られた後に，遺存していた基壇上に建った小建物の礎石と考えられ，時代もかなり新しいものである。

最後に，南大門を含めた中門，南面東回廊地区における罹災と修造の関係についてふれておく。概要で述べたように，昭和55年に行った南大門内部の東方地域の調査では，創建時の地形

7）文献1）によれば『縁起』に記す桁行寸法51尺が，検出した中門の中央3間分に相当することから，天禄4（973）年の火災焼失後に5間から3間に縮少したのではないかと推論し，また宮上茂隆「薬師寺仏門・回廊の規模形態と造営事情」（『日本建築学会論文集209』，p.73—94）によればこの逆の推論がなされているが，いずれも昭和57年の調査によって否定された。

から現代に至るまでの土の堆積状況を土層断面観察によって把握している（Fig. 10）。

整　地　その結果，このあたりでは，薬師寺創建にあたって池沼地形を大規模な盛土によって整地したことが判明した。この盛土は上面海抜高が約 59.30 m，厚さは確認した範囲で約 60 cm であった。盛土直下は厚さ約 20 cm の植物質を含有する池沼状の堆積である。前述したように，創建時の南大門四周の推定復厚地盤高は 59.94 m，中門南面の推定復原地盤高は 60.05 m であるから，造営以前の池沼地形は，これらの地盤面より約 1.3 m の深さをもっていたことになる。確認した盛土厚は約 60 cm であるが，薬師寺創建時の整地盛土量が膨大であったことをうかがい知ることができる。

瓦溜り　この盛土を掘込んで，大規模な瓦溜りがある。調査区の面積が 60 m² と狭いにもかかわらず，この瓦溜りから軒瓦約 300 点をはじめ，多量の瓦塼類や凝灰岩片等が出土した。これらの軒瓦の80％は本薬師寺式であり，その他に平城宮式約15％，さらに平安時代の復古瓦若干量を含む。また創建南大門にあてられる隅木蓋瓦[8]，及び10世紀後半代の土師器も出土した。この瓦溜りは池沼を整地した盛土面に深さ約 1.0 m の土壙を掘り，瓦塼類等を捨て込んだものである。

この瓦溜りの上面は厚さ約 30 cm の整地土が覆い，その直上には天禄 4 年（973）の火災に伴う厚さ約 30 cm の木炭まじりの焼土の堆積層がある。この焼土層からは，巡方帯金具を模した塑像の断片と考えられる土製品が出土した。昭和57年の調査では，南面東回廊の南約 80 cm の位置から更に南へ落ちこんでいく掘形を土層断面において確認している。この掘形の埋土は10～11世紀の土師器片を含む焼土で，昭和55年の調査で確認した焼土層に連続するものと考えられる。従って，瓦溜りを形成し，上面を整地した後に再び火災によって生じた焼土を投棄するために土壙を掘削したのであろう。

このような土の堆積状況のうち，瓦溜りと焼土層との関係は，天禄 4 年（973）の火災以前に伽藍の大修造のあったことを示している。瓦溜りから出土した大量の瓦塼類や凝灰岩片の中には創建時の南大門の隅木蓋瓦を含むから，これらの遺物の大半は南大門の修造に伴うものであろう。そしてこの瓦溜りの形成期は，出土遺物から10世紀後半代に比定し得るから，伽藍の修造と火災焼失の時期は極めて近接しているものと考えられる。

水害と火災　このことは，中門南面の基壇外装が水害によって崩壊していることをうかがわせる。すなわち，水害と火災とは，遺構層序から極めて短い期間に相次いで発生したことが察せられ，瓦溜りが示す修造が水害に伴うものであった可能性が高い。水害によって基壇崩壊だけではなく，屋根瓦にまで被害をもたらすという可能性は低いから，瓦溜りに捨て込まれた大量の瓦塼類を考慮すれば，中門基壇を崩壊させた水害は大風をともなった風水害であ[9]ったのであろう。中門では基壇外装の裏込めに焼土を混じえているから，風水害の後，中門の基壇修造には着手しないうちに，間もなく発生した火災によって焼失したと考えられる。

以上のように，風水害の罹災後，南大門の屋根の修造を行ったものの，中門の修造に着手する以前に天禄 4 年（973）の火災によって焼失し，『縁起』に記すとおり寛和 2 年（986）から寛弘 3 年（1006）にかけて中門の，また寛弘 3 年（1006）から長和 2 年（1013）にかけて南大門の大規模な再建が，それぞれ行われたのであろう。

8）杉山信三・松下正司・阿部義平「薬師寺の最近の発掘調査」（『仏教芸術』74，p. 85，1970）

9）この頃の大風，洪水，地震などの災害の記録は多いが，とりわけ天禄 4（973）年に近いものとしては，応和 2（962）年の大和，近江の大風雨がある（『日本紀略』）。これによって東大寺南大門が転倒するなど，公私の廬舎，神社，仏宇の多くが壊われるという大被害があった。小鹿島果『日本災異志』五月書房，1983，青木滋一『奈良県気象災害史』養徳社，1956，等による。

iv 脇　　門

現南門の西約 41m の位置に築垣に開かれた潜門がある。この門の南北にトレンチを設けて発掘調査を行なったところ，この潜門と一致して創建時の南大門脇門（潜門）か，その南北に石敷の歩道を発見した。この歩道の中軸線を脇門の中心とみると，南大門からの心々距離は41.42m（天平尺140尺）である。 **脇　門**

脇門は現存の門と一致しているために，親柱の位置や築垣との取付き状況は検出できなかったが，凝灰岩と玉石を混用した基壇石列を検出した。この基壇石は南と北で石の大きさ・形状が異なり，また，北側は南側より約 40cm 高く据えられ，北側基壇は現在の潜門に近い時期のものと思われる。南側の石列は基壇の縁辺に沿って並べた基壇葛石で，南側にある石敷歩道より約 15cm 高く据えられ，層位的にも歩道との関係からも当初の潜門の基壇と認められる。

基壇幅は東西約 4.6m で，その中心は歩道の中軸線よりも約 40cm 西にずれる。葛石列は西半部が完存し，東半部は攪乱が大きく，さらに東に葛石列が延びていた可能性もあり，歩道中軸線が門の中心と一致していたものとすると基壇幅東西は約 5.4m（18尺）となる。 **基　壇**

南大門の東西方向の中軸線から，潜門基壇南側葛石までの出は約 1.5m（5尺）であるから，基壇南北幅は10尺と推定される。

石敷歩道は径 15～30cm の玉石を幅 1.2m 弱（4尺）に敷詰めたもので，軸線は北でやや東に振れている。歩道は門心から北で約 6m，南で約 15.5m 分検出され，高さは門の内側で外よりも10数 cm 高い。 **石敷歩道**

B 西　　塔 (PL. 17～22, PLAN. 18)

i 概　　要

西塔跡には万治 3 年（1660），食堂の西北方にあった文殊堂が移築されたが（『薬師寺志』），床下には塔心礎の残存することが知られていた。昭和 9 年，文殊堂が再度移築された際に，日本古文化研究所によって心礎を中心とする基壇上部の発掘調査が行われた。その結果，心礎は原位置を保つが，文殊堂に再用されていた方形柱座のある 2 個の礎石は動いており，基壇上部は礎石搬出にともない，削り取って土を入れ替え，規模も小さくなっていることが判明した。また，享禄 1 年（1528）の西塔焼失（『薬師寺志』，『薬師寺年紀』，『縁起国志』）を裏付ける焼痕を確認，西塔内に安置されていた塑像の断片や銅銭が発見されている。[10)]

その後，西塔跡は土壇の崩壊を防ぐために周囲に乱石積の土留を設け，文殊堂礎石の多くもそのまま残して整備が行われた。

西塔跡の発掘調査は昭和44年，西面階段部約 30m² について行い，基壇の規模と形状および廃絶の経緯についての概要を把握し，塔内に造られた須弥山の破片を検出したが，さらに昭和51年に西塔復興計画に伴い，改めて基壇全面について発掘調査を行った。

発掘の結果，周囲の旧地表面は現地表下 70～80cm にあり，地覆石の一部と羽目石の残欠を検出した。基壇の形式は束石のない壇上積で，規模は一辺約 13.7m，高さ約 1.3m であった。四面中央には石階が取り付く。心礎は原位置にあり，四天柱と側柱は礎石据付け掘形を検出し

10)『日本古文化研究所報告第五　薬師寺伽藍の研究』（足立康著昭和12年 7 月）

た。裳階礎石の掘形はすでに削平されていたが，西塔の平面形式は東塔と同一であることが裏付けられた。基壇外周部には金堂と同様に玉石敷の犬走りと雨落溝が巡り，さらに塔周辺を限る見切りの立石列が方 20.75 m の区画を構成しており，さらにその外方にも玉石敷が延びている。基壇の築成は旧表土の上に直接盛土を行い，心礎下部は特に入念な築成が行われていた。また享禄 1 年の火災焼失以前に，すでに周辺部の玉石敷が埋れていたことなど，焼亡までの経過も明らかとなった。

ii　基　壇　外　装

基壇の外装は花崗岩製地覆石と凝灰岩製羽目石の一部が残っていた。地覆石は西面南半部の全部と北面東半部の一部，西面石階南側及び他の石階の一部に残っていた。羽目石はわずかな残欠だけで，当初の形状を知り得るものとしては西面南半部に一枚残っていたにすぎない。

地　覆　石　地覆石は花崗岩製（長さ 50～90 cm，幅・高さとも約 30～50 cm）で，野面（自然）石の見え掛りだけを加工したものである。上面には羽目石を受けるために，前面から 16 cm 程の幅を置いて，内側を約 1 cm ほど低く彫下げている。地覆石上面のレベル（標高 60.42 cm）はやや不陸を生じているがほぼ一定とみてよい。地覆石上端から犬走りの石敷面までの見付成は約 10 cm である。なお，西南隅地覆石では西面に幅 2 cm ほどの面を取っている（Fig. 17）。

石　　階　石階の地覆石は，東・西石階の南側と，南石階の東隅に残る。隅石の形状は長辺 60 cm，短辺 40 cm ほどで，上面に幅 12 cm 前後，長さ約 20 cm の長方形の枘穴がある。枘穴は内側から外方に低く傾斜し，最大 4 cm ほどの深さとなる。東石階隅石の西に並ぶ地覆石にも同様の枘穴があるが，彫誤りか転用材かは明らかでない（Fig. 16）。

羽　目　石　西面南半部に残る羽目石は凝灰岩製で，据付け位置も当初のままと考えられる。長 64 cm，厚さ 30 cm ほどで，高さ 60 cm ほどが残る。羽目石前面は地覆石上端欠込みの前面にほぼ位置を揃えている（Fig. 15）。

なお，北面石階東側にも地覆石と羽目石を残すが，地覆石は上面が平で羽目石を受ける仕口がなく，この上にのる羽目石との間に瓦片を挟むことなどから，当初のものではなく，後の補修による仕事と考えられる。

敷　　石　基壇上面の敷石は葛石ともに全く残っていなかった。昭和 9 年の発掘の際には心礎の西側に凝灰岩製敷石が 3 枚，当初の位置を保っていたと報告されている。

iii　基壇の規模と形状

基　　壇　基壇規模は，地覆石の多くが欠失しているために，残存地覆石外面と，犬走り玉石敷き内面間，または犬走り内法寸法によって求めると，四辺はほぼ等しく約 13.65 m（46 尺）である。地覆石上端（標高 60.33～60.35 m）と心礎上端（標高 61.62 m）との差 1.27～1.29 m に地覆石の見付高さ約 10 cm を加えると，心礎上面までの高さは約 1.37～1.39 m である。したがって，基壇高さは犬走り玉石敷きから葛石上端まで 4 尺位と推定される。

石　　階　石階は基壇の四面の中央に設けている。石階の幅は地覆石外面から犬走り内面まで，北石階 2.87 m，西石階 2.90 m である。東・南石階もほぼ同寸と考えられる。東・西石階の耳石受け枘穴心から地覆石外面まで約 27 cm であるから，耳石心々間は 2.33～2.36 m と推定できる。この寸法は東塔初重の中の間寸法 2.345 m と一致するから，耳石心を中の間柱心と揃えて石階幅を決定したものとすることができる。階段の出は残存度の良い西石階で 1.78 m（6 尺）で

ある。北石階の地覆石は後の補修によって位置が動いた可能性があり，また南石階についても，耳石受けの地覆石外面から枘穴心までの間隔が東・西石階より広く，これも後に移動した可能性が強い。

iv 基壇の築成

基壇の築成方法に関しては塔の南北中軸線上の南半部をたち割って確認した。

地山はバラス層で，この上に自然堆積による30～40cm厚の灰色砂層があり，さらに暗灰色砂混り粘土層と暗灰色砂層が薄く互層に堆積して，凹凸の多い旧地表を形成している。この旧地表面には瓦が多く散布しており，軒平瓦（6641-H型式）3点を検出した。

基壇土は掘込地業を行わず，旧地表面上に直接土を積上げ，特に心礎下部をていねいに突き固める方法をとっている。築成の手順は大きく4工程に分けることができる。

1. 基壇範囲内に瓦片とバラスを敷き詰め，心礎予定地の径4m程の範囲に下層に粘土，上　**築　成**

Fig. 15　西塔基壇西面南半部地覆石

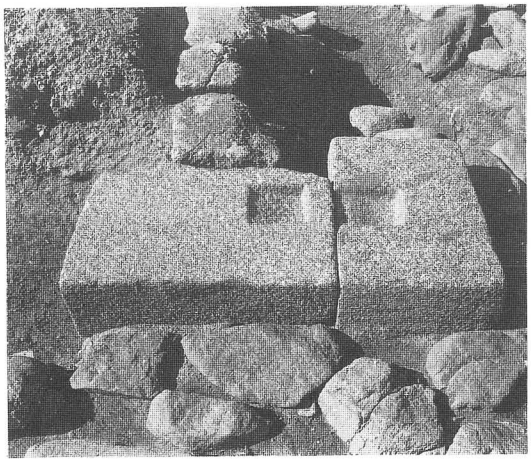


Fig. 16　西塔基壇東石階地覆石

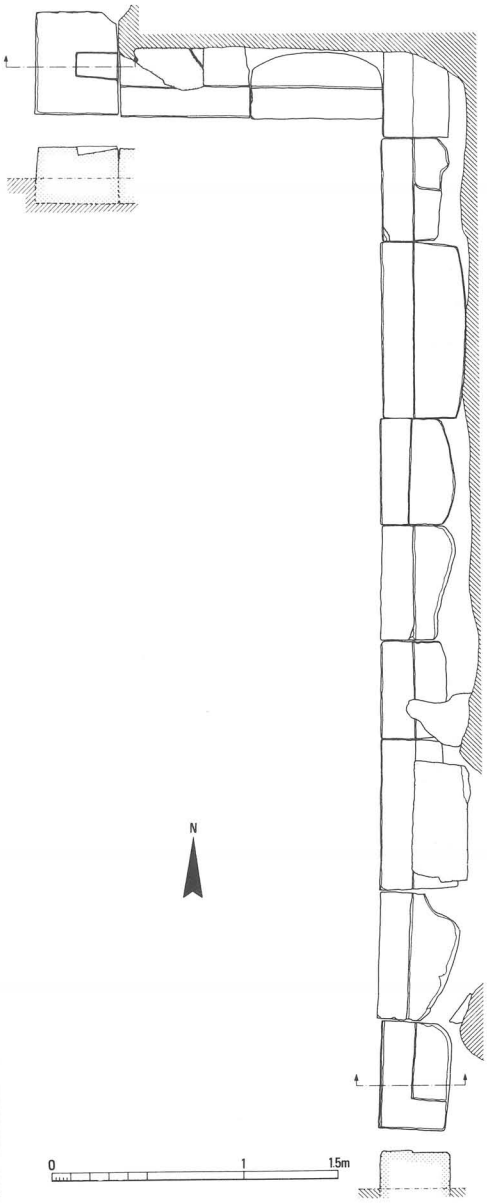


Fig. 17　西塔基壇西面南半部地覆石詳細

層に砂質土を厚さ20cmほどずつ積んだのち，基壇全域にわたり，粘土とバラス土を互層に比較的丹念に突き固めて40cm程の高さに積上げる。心礎下部径5mほどの範囲はやや窪ませている。つづいて心礎部分のみに砂質土と粘土を互層に細かく突き固めて土饅頭型に50cm程盛上げ，その周囲の基壇全域に粘土を15cm程の厚さに盛って，その上面から側面にかけて土壇全体を整形したのち，赤褐色粘質土（厚5cm）で均一に覆う。この土層は基壇外の旧地表上にも同じ厚さで広がる。この周辺部の高さは，ほぼ地覆石底面の位置にあたる。

2.　基壇周辺に厚さ20cm程の盛土整地を行ったのち，基壇上に盛土を行う。中央心礎土壇の周辺部から始めて粘土を40cm程積上げ，心礎部分は別に砂質土と粘土を互層に3層積上げる。この時点で根固め石を添えて心礎を据え，基壇上面まで厚80cmほどを砂質土と粘土を約10cmほどの互層にやや粗く積み上げる。

3.　第2工程での土壇築成が心礎部を除いてやや粗い仕事であるため，四天柱と側柱位置に平面方形の掘形を掘り，礎石を据えて周辺部を突き固める。裳階礎石も同様と思われるが削平を受けて掘形痕跡を残さない。

4.　基壇周辺部を削り取って基壇を整形し，基壇石を据えて，階段裏込め土を積み完成している。

v　礎石と掘形

基壇上面には心礎のほかに文殊堂礎石12個が残っていた。そのうち東南隅と東北隅の2個は方形柱座を有するもので，西塔礎石を再用して据え直したものである。文殊堂礎石を撤去して発掘を進めた結果，四天柱と側柱の礎石据付けのための掘形と抜取り穴を検出した。

心　　礎　心礎（PL.21）は長径2.7m，短径1.9m，厚さ90cm以上の巨大な花崗岩で上面中央に舎利孔がある。東・西・北辺は一段彫下げ，南辺では石の側面を整形して，一辺約1.8mの方形柱座を造り出している。ただし石材の寸法がやや足らなかったため，四隅とも野面のまま欠けた状態で不整形にみえる。造り出しの段差は西北側で9～10cm，東面で6～12cmほどである。心礎上面は平滑に仕上げ，現在もほとんど水平に据わっている。上端は標高61.62mで，東塔心礎より約10cm高い。

舎利孔は三重の円孔が同心円状に彫り込まれる。下段の円孔は直径30～33cm，深さ19～20cmで舎利容器を安置するところである。中段は直径44cm，深さ9cm程の蓋穴で，石蓋は現在別途に寺で保存されている。石蓋は径41cm，厚8.5cm，裏面を磨き上げて朱色の顔料が塗られている。最上段の穴は直径95～98cm，深さ15cm程で心柱の下端がここに大入れに納まる。この穴の周壁に沿って上幅3cm，下幅1cm，深さ3cm程の湿気抜きの小溝を巡らし，さらにこの小溝から北へ心礎を貫いて外部に達する細い穴が彫られている。この穴は直径3cm

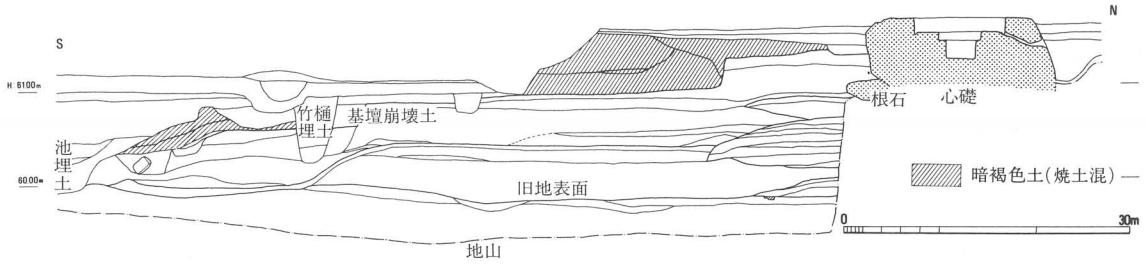


Fig. 18　西塔基壇南半部断面図

ほどで25度程の傾斜で外方に向かい，心礎表面付近では傾斜を緩めると共に，口径を広げ，心礎表面では直径12cmほどになる。

西塔心礎は従来から地表に露出していたために，早くから本薬師寺東塔の心礎との比較研究が行われてきた[11]。本薬師寺東塔心礎にも三重の円孔があり，柱孔・蓋孔・舎利孔の形状寸法が西塔と酷似している。異なる点としては西塔心礎の舎利孔がやや深く胴膨れとなること，柱穴周溝や湿気抜きの穴の有無が指摘されている。

礎　石

心礎の東北と東南の隅にあたる柱位置に，方形柱座のある花崗岩製礎石が残る。文殊堂の礎石として用いた時に据え直されているが，その形状からみて西塔の礎石であったことは明らかである。他は文殊堂を移建した万治2年または，それ以前に撤去されていたものとみられる。東北礎石は長径1.4m，短径1.2m，東南礎石は長径1.25m，短径1.1mで上面に方形柱座を造出している。柱座は上面で一辺62～71cm，高さ9～11cmで，金堂と較べるとやや小さい。

この2個の礎石が当初から現在の柱位置にあったものかどうか，明らかでないが，足立康は原位置とみなし，四天柱のうち東面と東北の2本の柱位置にあてた。両柱位置間の敷石が発見されたほど残りの良いことをその理由としてあげている。文殊堂移築の際，たまたま残っていたものを正面（東面）両隅に移した可能性も考えられる。

なお，他の文殊堂礎石は自然石の上面を平にしただけのもので，隅柱のみ大きな礎石（長径1m程）を用い，他の礎石はやや小振り（長径80cm程）である。

礎石掘形

文殊堂礎石を掘起して基壇上面の盛土を取り除いて発掘を進め，四天柱と側柱の礎石掘形を検出した。掘形は一辺1.5～2mの方形で，前述のように版築終了後に基壇上面から掘込んだものである。基壇土は上面から30～40cmほどがすでに削平されており，掘込みの深さは70cmほどと推定される。礎石の抜取り跡も一部で検出し，根石を使用した痕跡は見当らなかった。裳階の柱位置は一段低く削平されたために，掘形は検出できなかった。四天柱と側柱位置は東塔初重平面と一致し，中央間2.34m，脇間2.37m，初重一辺7.08mに復原できる。

削平を受けた基壇土の上面には20～30cm厚の焼土層があり，礎石を抜取った跡にも焼土が入り混っていた。なお北面の四天柱と側柱の間にあった長径1.5mほどの土壙の埋土には焼土が混らず，焼失以前に掘込まれたものと思われるが，その性格は不明である。その他に基壇上面では小穴を多数検出したが，いずれも新しい。側柱掘形外面にほぼ位置を揃えて，一段落ち込みがみられるが，これは土壇崩壊を防ぐために野面石を並べた痕跡である。さらにその外方40～80cmの位置にある小穴は文殊堂移築の際の足場穴であろう。

vi　基　壇　回　り（PL.22）

基壇回りには長径20～30cmの玉石を用いた犬走り・雨落溝・塔周辺を限る見切石，および見切石内外の玉石敷がある。東・西・北石階は遺存状況が良好だが，西南隅および南面は近世の池によって掘削され，東北隅も後世の攪乱を受けている。

犬走り

犬走りは幅60cm前後の比較的一定した幅で基壇周辺を巡る。玉石敷上面の標高は海抜60.3m前後である。

雨落溝

雨落溝は幅50～60cmで犬走り周辺を巡る。溝底にも石を敷き詰め，深さは7～8cmほどで

11)「薬師寺西塔心礎考」足立康，『東洋美術』第十一号　昭和6年6月などがある。

ある。基壇東南隅から南方に向って排水溝の底石を残すが，西南隅は攪乱を受け，西北隅は未発掘地にかかるため排水溝を設けていたかどうかは明らかでない。

立　石　列　石階前面の側溝外側石から約70cm離れて，厚10cm程の立石列が東・西・北面に部分的に残る。この立石列は，玉石敷面よりもわずかに上面を突出させ，外面を揃えている。塔の四周を正方形に巡る区画を形成していたものと推定される。区画の範囲は立石外面間で一辺20.75m（70尺）である。雨落溝から外側は，立石列の外も含めて少なくとも調査区内全面は玉石敷きであったと思われる。北のトレンチ拡張区では，基壇から8.5m離れた位置にもなお玉石敷がみられる。

玉　石　敷　これら玉石敷の上には灰褐色土層と焼土層が堆積している。灰褐色土層は，厚さ20～30cmで，上下二層に分れ，下層は瓦片を多量に含む砂質土，上層は瓦片を少量含む粘質土である。瓦は基壇北方から多く発見された。灰褐色土層の上面には瓦を多量に含む焼土層が50cmほど堆積していた。西面石階付近では灰褐色土層の上面に瓦片が敷詰めたように広がっていたが，これは西塔焼失直前の状況を示すと思われる。地覆石を抜取ったのは，この焼土層の下でも一部を検出しており，焼失前に行ったものと焼失後に焼土層の上から行ったものとがある。

近世の遺構　なお，塔跡西南方では池の一部を検出した。焼土層の上面から掘込まれたもので深さは最大80cmほどである。埋土は有機質を多く含む黒灰色砂質土である。出土した遺物から，この池は近世に掘削されたことがわかる。

基壇外の東と南では竹樋を用いた暗渠を検出した。南北暗渠は北でやや東へ振れ，東西暗渠は西で南へやや振れて東端は南北暗渠へ取付く。この分岐点および竹樋の継ぎ目には木製の溜枡をおく。暗渠の掘形は近年に敷かれた砂層下の旧表土面から掘切込まれており，池よりもさらに新しい近世以降の遺構である。

vii　ま　　と　　め

長和の『縁起』には，「一．宝塔二基　各三重　毎重有裳層　高十一丈五尺　縦広三丈五尺」と記し，西塔は現存する東塔と同一の規模・形式をもっていたことが明らかである。

東塔・西塔　東塔基壇の現状は，一辺14.5m，高さ0.76mの花崗岩製壇上積基壇である。周囲の地表面が高くなったために相対的に基壇が低くなっており，外装も明治31～33年修理の時に改造されたものである。明治修理前の東塔基壇平面図[12]によると塔基壇は1辺45.85尺（13.7m）で，西面と南面の一部をやや拡張してはいるものの，西塔の当初の基壇規模とよく一致し，ほぼ当初の規模を保っていたことがわかる。屋内の凝灰岩製敷石は，南北幅2尺前後の長方形であり，東西に目地を通して敷き詰め，金堂と同一方式としている。したがって東西両塔も南を正面として計画されたものと考えられる。側柱通りから外の敷石は各面で，葛石と平行に目地を通していたようである。

塑　　像　長和の『縁起』にはさらに両塔内に釈迦八相の群像を安置し，八相のうち入胎・受生・受楽・苦行の因相は東塔に，成道・転法輪・涅槃・分舎利の果相は西塔にあると記している。東塔塑像については心木約150点が寺に保存されており，中には塑土が付着してわずかに彩色の残っているものもある。西塔跡から出土した多量の塑像片とともに，釈迦八相の実態を知ることができるようになった。

12）『薬師寺東塔及び南門修理工事報告書』昭和31年　奈良県教育委員会所収

建立後，西塔は天禄4年（973）の火災を免れ（『縁起』），建治3年（1277）の雷火にも大事にいたらなかった（『黒草紙』）。しかし，康安元年（1361）の地震には，一基は傾き一基は九輪が落ち，東西両塔共かなりの破損をこうむった（『嘉元記』）。大永4年（1524）の金堂・東西両塔再興の勧進状には，両塔は九輪が傾き，塔内の泥造の巌窟や仏像からなる八相は雨露のために破損しつつあると記している（『薬師寺文書』）。　罹　災

享禄元年（1528）には兵火のため，金堂・講堂・中門・僧房等と共に西塔も焼失したと『濫觴私考』などに記されており，発掘の結果もこのことを裏付けた。西塔安置の舎利に関する記録はないが，おそらく焼失直後に取り出されたのであろう。

その後礎石の多くが抜き取られ，万治3年（1660）には，文殊堂が塔跡に移建されるに当り，基壇外周部が削平されて一回り小さい土壇となり，このため裳階礎石の据付け痕跡も失われることとなったが，心礎は文殊堂床下に残り，現在まで当初の状態を伝えていた。

C　金　　堂（PL. 3～16，PLAN. 16）

i　概　　要

創建薬師寺金堂跡には，享禄4年（1531）から天文14年（1545）にかけて再建された（大斗に天文14年の墨書）。一重，入母屋造で正面に5間の向拝がつく建物が建っていた。この金堂は慶長5年（1600）大改修（棟木銘）を受け，さらに寛保元年（1741）から安永6年（1777）にかけて修理が行われた（墨書）。金堂基壇の発掘調査は昭和44年に建物を避けて基壇周辺部の一部の発掘を行い，その後金堂復興工事に伴って，昭和46年8月に前の建物は興福寺講堂跡に移建され[13]，同年11月から12月にかけて改めて基壇の全面発掘を行った。

現基壇上には創建当初の花崗岩製礎石の多くが残り，礎石のほかに凝灰岩製敷石の一部も当初のまま残っていた。しかし，後世に周囲の地盤が高くなったこと，江戸時代に基壇を一回り大きく拡張したことによって，当初の基壇の状況は不明であった。

現基壇は高さ約1mの花崗岩壇上積基壇で，発掘に先立って写真測量等の現状調査を行い，ついで江戸時代拡張部の基壇外装材，敷瓦，旧裳階柱筋に重ねた礎石と地覆石および向拝の礎石を取り外し，ついで周囲の新しい裏込土，堆積土を取り除いた。

創建地表面は現地表下約70cmにあり，当初の地覆石すべてと南面羽目石がほぼ完存するなど創建当初の姿が明らかとなった。基壇規模は東西29.40m，南北18.26m，高さ1.3m，凝灰岩製の壇上積基壇である。石階は南面に3個所，東・西・北面に各1個所の計6

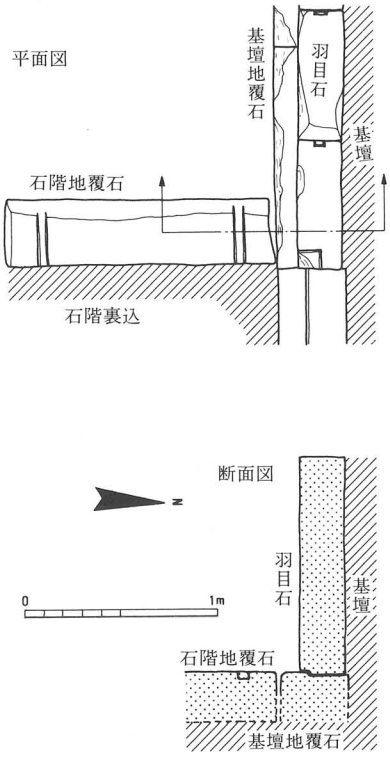


Fig. 19　金堂南面中央石階詳細図

13）『興福寺仮金堂建設工事報告書』興福寺，昭和50年。

個所で，基壇の周囲に玉石敷の犬走りと雨落溝が巡る。また，現向拝礎石下から同位置に中世設置の土庇礎石を検出し，基壇外装の補修や石階の設置と撤去の経緯など，建立以後の変遷が明らかとなった。

ii 基　壇　外　装

基壇外装は凝灰岩製の地覆石・羽目石・葛石からなり，束石を用いない壇上積基壇である。

地　覆　石　地覆石は石階前面を除いて遺存状況は良好である。南・北面中央石階の石階取付部では石階裏込土の下にも地覆石を引通して据えている。他の石階では地覆石は部分的に延びるだけで引通してはいない。基壇規模は地覆石外面間で東西 29.40m（99.3尺），南北 18.26m（61.7尺）である。

地覆石の形状は，断面が一辺 36cm 前後の正方形で，長さは 1.0～1.3m と開きがあるが，半数は 1.10～1.16m に集中して，これより規格のはずれるものは基壇四隅や，石階付近に用いている。地覆石上面の後端部には羽目石との相欠きの仕口（幅 15～20cm・深さ 3cm ほど）を施している。地覆石前面上隅部分はほとんどが風化のため欠けてしまっているが，当初の形状をよく留めている石階裏込下の地覆石によると面は当初から取っていない。

石階地覆石　石階の地覆石には基壇取付部の近くに水抜き用と思われる小溝（幅約 6cm）を彫ったものが，南面中央石階西側と南面西脇石階西側にみられる。石階前面両端の地覆石は，西面石階ではL字形に造出し，北面石階では一辺 40～50cm の略正方形の一端を欠込み側面地覆石と組み合わせている。ともに上面には耳石を受ける枘穴（1辺 15～20cm ほど）を穿っている。

羽　目　石　羽目石は南面の階段に挟まれた部分で完存し，北面西半部にわずかに残る。羽目石の残存数は南面21個・北面 4 個および東南隅と西北隅各 1 個の合計27個である。このうち南面の21個以外は上半部が欠失している。石階側面の羽目石は，南面中央石階東側で 1 個残るが摩滅して当初の形状を留めない。

羽目石の大きさは高さ 1.12m，厚さ 20～27cm，幅 65～71cm で，隅の羽目石は平面L字形に造出し 2 辺の幅を他に揃えている。

羽目石の仕口は下端前角には奥行数 cm，高さ 3cm の欠込みを施こし，地覆石内方の欠込みと組合わせている。上面の葛石との仕口は羽目石の心に幅 7cm，高さ 3cm の枘を造り出している。側面には幅 6cm・深さ 3cm ほどの雇い実矧（やとさねはぎ）の溝をほっているが，両脇に溝をつけているのは 2 枚だけで，他は片側のみであるから，実際には用いられなかったものと考えられる。なお，正面羽目石上端に根太を掛ける欠込みがあるが後世の仕事であるので後述する。

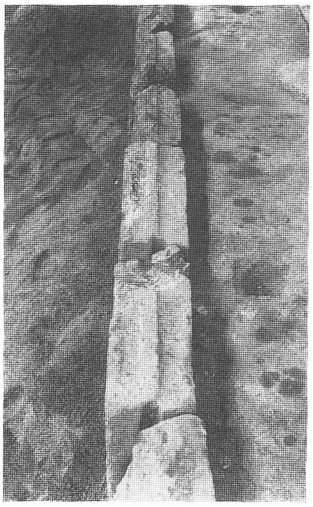


Fig. 20　金堂羽目石上端枘

葛　　石　葛石はまったく現存せず，当初の形状は分らない。側柱礎石上面と羽目石上面との差は 20cm ほどであるから，葛石の厚さは，それより薄く，地覆石見付高さ 15cm（5 寸）より厚めの 6 寸程と推定される。

敷　　石　基壇上面は凝灰岩製敷石（長辺 72cm・短辺 50cm・厚さ 12～15cm ほど）を布敷とする。数度の補修が行われ，表面観察からは大むね 3 回の時期に区分できる。当初かあるいはそれに近い時

期の敷石は，北・東・西面の裳階と入側部分，内陣の旧須弥壇下部分に残る。時期がこれより降るものでやや古い敷石は南面の裳階と入側部分および内陣須弥壇の北・東側に広く残る。比較的新しいと思われる敷石は南面の裳階と入側部および内陣仏壇周辺に部分的に残る。後補の敷石も当初の敷石と形質は同じである。

敷き方は東西方向に目地を揃えて横長に据え，南・北側柱筋では，礎石幅に合わせて南北縦長に据えている。また，南北方向中軸線の目地を通しているので，中軸線から東西へ振り分けて敷いていったものと考えられる。なお，敷石は礎石柱座の造出し高さ約 10cm より厚いため，礎石に接する敷石の下端を欠きとって上面を礎石上面より数 cm 低く据えている。

須弥壇は本尊薬師三尊像の修理の時に解体修理を受け，その調査結果にもとづき規模・形式等が旧形式に復原されている。[14]　**須弥壇**

須弥壇下の敷石は須弥壇地覆石の幅約 30cm に合わせて上端を約 2cm 彫り窪めている。須弥壇の規模は地覆石外面間で東西 10.07m，南北 3.25m であるから長和の『縁起』に記載する「仏壇長三丈三尺，広一丈六寸」にほぼ等しい。

須弥壇内の北東隅では敷石がやや落ち込み，敷石の厚さも 11cm と特に薄く，敷石直下の砂層には金具片・玉片が混入していた。須弥壇敷石の北列東から 2 番目と 3 番目の敷石下からは長辺 65cm，短辺 46cm，深さ 60cm の長方形の掘形と，掘形内に径 40cm 程の後世の攪乱穴を検出した。掘形中央部に径 20cm ほどの穴があり，掘形埋土からは土師器片が出土している。この攪乱穴は鎮壇具の抜取り穴と考えられる。

iii 基壇の築成

金堂創建前の旧地表は全体的には北西が高く東南に低く，海抜標高 59.70～60.15m である。基壇築成にあたっては掘込地業を施こさず，地山上に直接土壇を築成している。土層の厚さは 4～7cm 程の版築で16層から20層を数える。土層は周辺部に向って低く傾斜しているので，堰板を用いた工法ではなく，盛土ののち周辺部を垂直に削り取ったものと思われる。土は粘土と砂質土を交互に積上げる。旧地表から 4～5 層まではやや軟かな盛土整地的な土層で，この上に厚く粘土層（約 20cm 厚）を重ね，これから上は固くしまった版築層である。

礎石の据付けは地覆石上面から 70cm ほどの高さまで築成した後に掘形を掘り，側柱と入側柱の礎石を据付け，さらに基壇上面まで築成し，裳階礎石は最上面から掘形を掘って据えている。いずれの場合にも礎石下には根固め石を用いていない。

次に土壇周辺部を基壇規模に合わせてほぼ垂直に切り，地覆石と羽目石を据える。地覆石の据付面は旧地表の高い西北部は旧地表を 7cm 程掘込み，他では第 2～第 4 土層に乗っている。地覆石のレベルは旧地表の影響を受けて東南部は西北部より 20cm 程低い。上面の敷石は，築成土上面に薄く砂をひいた上に敷き，石階は基壇羽目石据付け後に裏込め積土を行なっている。

iv 礎　　石

礎石は方形柱座を造出した花崗岩製礎石で，西面入側の礎石 2 個を抜き取っているほか64個すべてが遺存している。側・入側の礎石は当初のままの状態を保つものと考えられるが，裳階礎石については一部で据え直しを行っていることを確認した。

---

14)『薬師寺国宝薬師等修理工事預旨書』薬師寺修理委員会　昭和33年

側・入側礎石　側・入側の礎石の大きさは径 120～180cm，高さ 1.0cm ほどで，上面に方形柱座を造り出す。方形柱座は側で上端の一辺長 69～77cm で，一辺 71cm 前後（2.4尺）が最も多い。入側では柱座上端の一辺長 71～81cm で，南面入側がやや大きく約 80cm（2.7尺），その他約 75cm（2.5尺）で，柱座の大きさに差がある。柱座成は良く残っているところで約 10.5cm（3.5寸）である。

裳階礎石　裳階礎石は側・入側の礎石よりさらに一まわり小さく，長径 80～100cm，短径 60～70cm の花崗岩で，方形柱座は上端の一辺 33～36cm，下端の一辺 40～46cm，柱座成 8.5～15cm である。建物の外に面した柱座は一段高く造出し，他の面よりも礎石面を 2～5cm 低く，段差をつけているが，後のハツリによって段差のはっきりしないものが多い。西面中央の礎石は内側（東側）に段差があり，反転使用されている。また，この北側の礎石は 1 辺 60cm 以上の方形柱座をもつ礎石を，柱座の一面だけを残して小さく割り，裳階礎石に転用したものである。

地覆座　入側礎石のすべてと背面裳階の中央 4 個の礎石には柱座とともに地覆座の造出しがある。側柱の正面中央間の礎石では地覆座状に礎石を欠いているが，これは後世の仕事である。

入側の地覆座の幅は南面中央 3 間分と北面中央 1 間は広く（41～61cm），他は幅が狭い（16～27cm）。したがって金堂の柱間装置は，入側は正面中央 3 間と背面中央間が扉口，他は土壁である。側通りには地覆座がないので吹放ちで柱間装置はなかったものと考えられる。裳階は背面中央 5 間に地覆座をもつが，柱間両脇に地覆座を造り出すのは西脇の間だけで，東方の 2 個の礎石は東方にだけ地覆座を造り出しているので柱間装置の有無を即断することはできない。

礎石の柱座上面は金堂再建時に削平したり，沓石や木製板を礎石に重ねて柱下端のレベルを揃えていた。側・入側礎石の上面が削られていない部分で比較すると，全体として西北部が最も高く標高 61.71m，東南部が最も低く標高 61.53m で 18.0cm のレベル差がある。裳階礎石については西北部が最も高く標高 61.555m，西南部が最も低く標高 61.390m で，16.5cm のレベル差があり，全体に側・入側礎石よりも 9～15cm 程低く据えられている。四隅の側柱礎石は荷重が特に多くかかることから，他の礎石に較べて沈下が大きい。これを考慮に入れても，

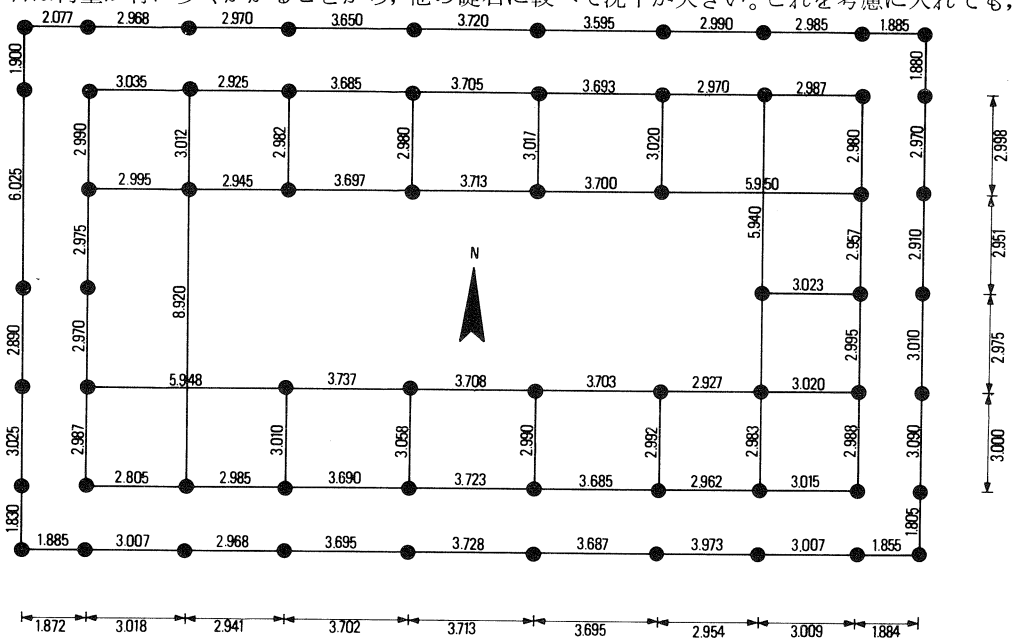


Fig. 21　金堂柱間寸法一覧

礎石は西北から東南方向に向って漸次低く10数cm程のレベル差があり，前記の地覆石と同様に旧地形の影響を受けたものとみることができる。

なお礎石上面には焼けた痕跡の残るものがあって罹災したことが明らかであり，柱当りの焼損痕跡から側・入側の柱径は約60cm（2尺），裳階柱径は約30cm（1尺）角と推定できる。

v 柱 間 寸 法

礎石は当初の位置を動いてはいないものとみられ，当初の柱間寸法を知ることができる。また，礎石は基壇上部に露出していたため，従来から金堂の柱間寸法については，桁行中央3間各12.5尺，両脇各2間10尺，梁行4間10尺等間，裳階の出は桁行中央柱間の半分の6.25尺とされてきた。各礎石の方形柱座の心をきめ，地覆座付礎石は地覆座心で補正し，各柱筋について柱間寸法を求めたものが Fig. 21 である。

裳階を除く桁行柱間総長23.032mの計画寸法を77.5尺とすると造営尺は1尺＝29.719cm，梁行総長11.924mを40尺とすると1尺＝29.81cm となり，桁行と梁行で造営尺にやや差が生じる。そのうえ10尺の柱間のなかでも身舎桁行両端間と身舎梁間よりも四面庇通りの出がやや広い実測値を示す。桁行についてみると中央3間11.110m，すなわち37.5尺（12.5尺等間）とすると1尺は29.627cm となり，これに両脇間を加えた中央5間17.018mを57.5尺とすると1尺は29.597cmとなる。この造営尺によると両端間3.007mは10.15尺ないし10.16尺となり，梁間11.925mについても40.25尺，または40.3尺を得る。すなわち，造営尺を1尺＝29.6cmとして，四辺の庇の出は10.15尺となるので，側柱には1寸5分の内転びを付けていたものと推定される。

各面の裳階の出の平均寸法は約1.88mで，造営尺を29.60cmとすれば6.35尺となる。しかし，礎石の一部を据え替えていて各礎石位置のずれが大きく，そのため各面の裳階の出の平均値を求めても，最大 9cm ほどの開きがあって正確な計画寸法が求められない。したがって裳階の出については従来どおり，桁行中の間 12.5尺×1/2＝6.25尺 を計画寸法としておく。

vi 石　　階

石階は南面に3基，東・西・北面に各1基設けている。南面中央と北面石階は桁行中央間の柱心に，南面東・西石階は端の間の柱心に耳石心を揃え，東・西面石階は基壇中央に設置する。石階幅は南・北面中央石階が約4.15～4.18m（14尺）で，その他は幅約3.53～3.59m（12尺），石階の出は約1.54～1.65mである。

南面中央石階取付部では基壇羽目石に火災の痕跡があるが，この痕跡は石階内部に通る 4mの部分には見られない。この痕跡によって石階側面の羽目石から同地覆前角までの出は 8～9cm ほどであったことになり，石階の取付部にも束石を用いていなかったことがわかる。また南面東石階では幅12.5cmの石階東側石羽目石取付き痕跡が基壇羽目石に残っている。

石階の積土は基壇地覆・羽目石取付け後に行なっている。南面西脇石階の西側地覆石掘形から瓦器片が出土しており，西面石階の地覆石掘形からも平安末期と推定される軒平瓦が出土して地覆石が据えかえられており，西面階段は中世に全面的に積替えを受けている。

vii 犬走りと雨落溝

基壇外周部で玉石敷の犬走りと雨落溝を検出した。玉石は長径30～60cmほどの玉石で粘土層上に据えている。遺存状況は西・北面がよく，東・南面では多くの玉石を抜き取っている。

犬走り　犬走りは，地覆石にそって，地覆石上面から約15cm下に玉石の上面を揃え，2～3列に敷き並べ，溝側壁を兼ねる葛石にはやや大振りの石を用いる。犬走りの幅は一定でなく東・西・北面で約60～85cm，南面がやや広く70～85cm前後である。石階前面では幅が狭く，約40cmである。地覆石前面の欠損部分に玉石を補足し，また補修による部分的な据え替えが行われている。

雨落溝　雨落溝は側，底とも玉石で幅約50cm，石階前面の幅は狭く，30～40cm，深さ10cmほどである。底石の抜取り面のレベルで比較すると，西北隅が最も高く，東南隅が最も低く，その差は約25cmである。なお，遺存状態が悪いので確定しないが雨落溝は基壇北辺で東と西に，南辺で東に排水溝を通していたようである。

雨落溝の外側は側石を含めて幅約60cmの玉石列で，外面を揃えている。これよりさらに外側にも玉石敷があり，石敷面は玉石列より数cmほど低く，玉石列から玉石敷外面まで約2.1m（7尺）幅である。玉石列は基壇側溝に沿って，玉石敷は金堂域を長方形に区画するかたちで基壇外周を巡っていたと思われるが，基壇東・西・南面における遺存状態は極めて悪い。

viii　須　　弥　　壇

須弥壇は昭和27年，脇侍月光菩薩像の修理にともない，西方三分の一の調査が行われて，須弥壇内部の独特の構造や背面と側面が拡張されていることが知られ，さらに昭和30年から同33年にかけて本尊台座の大修理が実施された際に，須弥壇の本尊下から東方部の調査と修理が行われ，旧形式に復原されていた。この復原須弥壇は復興された新金堂にほぼそのまま再用されている。三尊修理時の調査の状況は，三尊の『修理工事報告書』に記されているが，これに従ってその状況を略記すると，従前の須弥壇は間口37.05尺，奥行13.30尺で，来迎柱（身舎背面入側柱）に接し，高さ1.8尺内外，背面中央間の部分は約2.5尺引込んでいた。壇上積の形式で，正側面および背面中央間の地覆石・羽目石・葛石は大理石を使用し，その他来迎柱に接する部分と中央間入り込み部分両脇は凝灰岩は使用し，束は羽目石から造り出す。上端は日光菩薩像台座の下と本尊台座下框周辺部は大理石の敷石がよく残り，台座内部にかくれる部分は凝灰岩の敷石がよく残っていたが，その他は極めて乱雑な状況になり，背面中央間の外装大理石も甚しく破損していた。

須弥壇拡張　この須弥壇は後に両脇の後方が拡張され，当初の大きさは間口33.25尺，奥行10.72尺の壇上積で，基壇とは違って束を羽目石から造り出しており，背面入側柱との間が2.7尺程あいている。地覆石・羽目石・葛石はいずれも長さ1尺7寸ないし1尺8寸，幅1尺，厚さ5寸程のほぼ同寸法で，束石は羽目石から造り出し，その石材のみ厚みが大きい。床面には須弥壇下も全体に凝灰岩敷石があり，地覆石を置く部分は，敷石の上端を地覆石の幅全体に深さ7分程ほり下げ，葛石は羽目石の上に天のりとなる。須弥壇の内部は長さ平均4.5尺，幅約1尺，高約1.3

詰　　石　尺の凝灰岩切石を前後2列に南北方向に敷石上に並べ，須弥壇内部を詰め満たす。（詰石と呼ぶことにする。）詰石の両脇や前後木口の地覆石尻に当る部分では詰石の方を欠き取っている。このような工法は珍らしいが，重量の大きい銅造の三尊像を安置することを考慮したためである。

また，この詰石の先端上端に帯状の突起を造り出し，葛石尻に溝をほって葛石のすべり止めとしている。上端の敷石は葛石と同じ厚さで，当初の状況のよく残る本尊台座下と日光菩薩台座下では，長方形の大小さまざまな切石を各間でそれぞれ周辺から張りつめて，中央で最後の

張り仕舞をし，本尊台座下の見えない部分のほかに日光菩薩台座下も張り仕舞の1石だけを凝灰岩としていた。なお，大理石の敷石を敷込む際，大理石の厚さに応じて加工が容易な凝灰岩詰石の上端を削って仕合わせているため，詰石上端の凹凸によって当初の敷石の目地の状況が明らかにできた。

ix　建立以降の基壇改修

金堂建立時の基壇については礎石や外装石材の形状が一様でないが，この点については考察にふれることにして，明らかに創建以降と思われる改修について年代を追って記すことにする。

中世以前の修理

中世以前の修理と思われるものは，基壇東北隅や南面中央石階の地覆石欠損部を花崗岩製のもので補い，基壇周囲の犬走り，雨落溝の玉石の補足，差替え等の補修が行われている。また，南面西石階や西面石階の地覆石掘形から瓦器片や平安時代末頃の軒平瓦が出土して，石階裏込め土にも全面的に積み直しが行われた形跡がある。

これに次いで大きな改修は，基壇周辺全面にわたって，約30cm厚程の盛土整地が行われ，この時に南・北面中央石階を残して，他の石階をすべて撤去し，金堂南面中央5間に，裳階からの出10尺の土庇が設けられている。

整地土中には多くの中世瓦を含み，金堂はかなり大きな災害を受けたことをうかがわせる。土庇礎石は長径1m，短径0.7m程の自然石の上面を平坦にしたもので，掘形や根固め石はなく整地土中に据えられている。

この整地土の上面には部分的に焼土面があり，また，基壇羽目石や礎石，土庇礎石に焼痕が残され，享禄1年（1528）の兵火焼失を生々しく伝えている。

旧　金　堂

火災焼失後，直ちに再建工事にかかり，享禄4年に立柱を行い，天文14年にかけて再建されたのが興福寺に移建された旧金堂である。この金堂の再建にあたっては，創建時の礎石を再用しているが，裳階礎石は不同沈下が大きく，南・北面礎石の方形柱座の上面を削り取って，柱座とほぼ同寸の方形礎石を重ね，側柱の礎石としている。また，側・入側柱礎石には石製の円筒形沓石を重ねて全体の礎石上面のレベルを揃えて柱を立てている。

基壇南面に残る根太掛の仕口は享禄火災後に設けられたもので，羽目石上端に縦15cm，横18cmほどの欠込みを中央間5間の柱筋と，各柱間の中央位置に施し，再建金堂土庇に基壇面と揃えて床を張ったものと思われる。

基壇の拡張

この土庇板敷きは，旧金堂向拝大斗墨書に「寛保元年　御拝柱六本新ニ造」とあって，寛保1年（1741）に改造されたことがわかる。このときに土庇の板敷きは基壇に改められて，旧土庇礎石は基壇下に埋め，同位置に新たに円形柱座をもつ礎石を基壇上に据えて向拝を新造した。これに伴って，基壇四周を約3尺拡張して，基壇外装を全面的に改めている。

基壇拡張の最大の理由は，当初の裳階礎石位置に再建堂では側柱を立て，軒先が大きく基壇外に出ることになったためであろう。

拡張後の基壇は花崗岩製壇上積で，拡張部の基壇上面は敷瓦布敷とし，基壇規模は東西31.05m，南北20.0m，高さ約1.0mで，南面向拝基壇の張出しは東西21.1m，南北2.75mである。

基壇拡張後の石階は南面は中央3間の柱間に合わせ，北面では中央間に柱間より狭く設け，東・西面の石階は撤去された。

基壇継足し部の積土や裏込土には中・近世の遺物を含み，向拝部積土からは多量の寛永通宝

が出土している。

なお，基壇拡張後にも周辺部に薄い盛土が行われて，地覆石がほとんど隠れるほどであった。

南面階段耳石には「石大工田村，坂口伊兵衛」の刻銘がある。拡張部上面の敷瓦には三種あり，「大正六年尼ケ辻瓦直工場」の銘のあるものと，これより古いもの及び新しいものがある。

D　東・西僧房 (PL. 23～39 PLAN 2, 7～11)

i　概　　要

長和の『縁起』によると「舊流記帳云々　合僧房捌条　大坊四烈」とあり，創建時の僧房は大房４棟，小子房４棟の８棟が４列に並んでいたと考えられる。その後14棟，６列に増加したが[15]，天禄の火災で東僧房，西僧房，東南僧房，東北僧房，西南僧房各２列と檜皮葺坊２棟が焼け，小子坊の１棟は10間が焼残ったが，ほとんどの僧房が焼失した[16]。

東僧房　昭和44年に食堂東北隅部分の調査で東へ東西トレンチを入れて東僧房北方部を調査した。昭和45年には食堂跡東辺と東僧房の発掘調査を行い，食堂東方で東僧房を検出した。この調査では東僧房の西端第１房の全体と付属屋及び大房基壇南縁の全長を検出し，さらにその東方でも掘立柱穴等を検出した。その状況から東僧房は９房と推定され，東端が南北棟の東面僧房に連なることが明らかとなった。その後，昭和49年に薬師寺境内整備計画に伴い東僧房と対称の位

西僧房　置で西僧房の発掘調査を行い，昭和53年には西僧房の小子房と食堂後方の十字廊の発掘調査を実施した。その結果，西僧房の大房は９房のうち東から７房分を検出し，大房・小子房・付属屋などがセットになって構成されていたことがわかり，また十字廊の状況も明らかになった。発掘地区の西北部は中世の池沼によってかなり破壊されてはいたが，大房遺構面は大部分厚く焼土に覆われ，天禄４年焼失時の床面の保存状態はかなり良好であった。また，昭和54年には，

東僧房　東僧房の復興計画にともない，昭和45年の調査地区を含めて大房９房分の全面発掘調査を行なった。第３房から第９房にかけては遺存状況が悪く，とくに第８・第９房は全く痕跡をとどめないほどであったが，大房の平面形式と付属屋の配置は西僧房と同一であることを確認した。

東・西僧房の配置はともに食堂両脇に雨落溝をへだてて，棟通りを揃えて東西一直線上に並ぶ。食堂と僧房間隔は西側で基壇間５尺，食堂西側柱心と僧房東妻柱心間23尺，東側では不明で，西側と同様に考えられよう。

大　房　大房の平面形式は桁行南面18間，梁間４間，南北庇付き建物で，桁行２間分を一房とする。柱間寸法は身舎10尺等間，庇の出９尺である。

小子房　小子房は大房の北に並例する桁行18間，梁間２間の東西棟建物で柱間寸法は桁行10尺，梁間７尺で，大房と小子房は南北方向の柱筋を揃える。大房と同様，桁行２間を一房とするが中間

---

15)『縁起』にいう「十四宇為六烈」の解釈について，福山は，旧法記にいう僧房８条，大房４列のうち，東西の僧房各２列を分離して教えたため２列，４棟が増えたとし，それに檜皮葺坊二棟を加え当初から十四棟，６列であったとしている。(『薬師寺』福山敏男，久野健　1958)。

16) 僧房の配置については諸説がある。福山は，講堂の東に東・東北・東南・西に西・西北，西南の各僧房があったと推定し（『薬師寺』福山敏男，久野健　東京大学出版会1958）鈴木は食堂両脇に東西棟，また回廊両脇に南北棟の僧房を推定している（『世界考古学大系４』平凡社昭和36年）。また，大岡も鈴木の説をとっている（『南都七大寺の研究』大岡実　中央公論美術出版1966）。

に間仕切がある。

大房・小子房間の中庭は，房ごとに仕切って各中庭に付属屋1棟を建て，大房・小子房・付属屋・中庭が僧房の1単位となり，大房と小子房間は11.45m（38.5尺）である。付属屋は桁行3間，梁間1間の南北棟で房境に接して各中庭の西寄りに建ち，大房と付属屋および付属屋と小子房との間を塀で仕切って房境とする。 **中　庭**

大房・付属屋・小子房はともに礎石建ての建物で，一連の低い土壇上に建つ。前面の葛石は西僧房では玉石を1列に並べたもので，東僧房では玉石を2～3個積上げた玉石積基壇とする。大房の南面葛石の出は7尺，食堂側の葛石の出は西大房8.5尺，東大房4尺で妻側の葛石の出を異にしている。

土壇外周の雨落溝は，食堂側は東・西ともに幅約2尺，深さ約0.6尺の玉石敷で食堂の雨落ちを兼ねる。南面雨落溝の葛石は西僧房では溝幅約2尺で建物側にのみ玉石の葛石を並べ，東僧房では溝幅約3尺で外側にも玉石を用いる。 **雨落溝**

東・西大房の基壇上面高さは，大房南側柱通り地覆石上面や同雨落溝によって較べると，東大房の方が西大房より20～30cm低い。西大房の礎石はほとんど同レベルであり，東・西僧房とも南雨落溝にはほとんど勾配がない。

ii　土　壇　築　成

東・西僧房とも大房下の地山面は標高約59.9mのほぼ均一の高さであることから，土壇築成に際して，旧地表を水平に削平したのちに，土壇盛土を行なったことがわかる。大房土壇盛土は，土壇縁辺部に薄く，建物の部分で高さ約45cm程，5層にわけて砂質土と粘質土を交互に盛上げる。次に礎石と間仕切地覆の据付けを行っているが，まず，礎石据付けのために，身舎で一辺1.5～1.8m，庇で1.0～1.2m，深さ40～50cmの方形掘形を掘り，根固め石を用いて礎石を据えたのちに，間仕切部分は礎石間を溝状に掘って瓦組地覆座を据付け，最後に土壇全面にわたって数cm厚の粘質土を置いて土壇上面を仕上げる。

東僧房では大房の北側雨落溝に当る位置に，付属屋南妻柱礎石据付け掘形の下で，大房北側柱筋から約2m北に並行して幅約80cm，深さ約30cmの素掘溝を確認した。この素掘溝から北は大房基壇上面と同高に埋土整地される。付属屋の礎石掘形はその整地面を切っているので，まず大房のみの土壇を作り，その後で北方を盛土整地し，付属屋と中庭を設けたことがわかる。 **素掘溝**

大房の礎石は東僧房ではすべて抜取られていたが，西僧房では約3分の2が残存する。礎石の形状は長径0.8～1.2m，短径0.5～0.8m程の花崗岩で，上面はほぼ平滑に作っている。第3，4房境の中央柱の礎石は1辺50cmほどの方形で，方形柱座の造り出しが認められ，転用材と思われる。

iii　大　　房

大房は東・西僧房ともに食堂を中間にして，棟の通りを食堂とともに東西に揃えて一直線上に建つ。西大房の第2～7房はもとの床面が特に良く残っており，礎石や束石等も多く残存している。東大房では床面を残すのは第1・2房のみで，礎石はほとんど抜取られ，西大房に比べて遺存状況は悪いが，平面形式等は西大房と同一であるので，以下は主として西大房の状況について述べる。

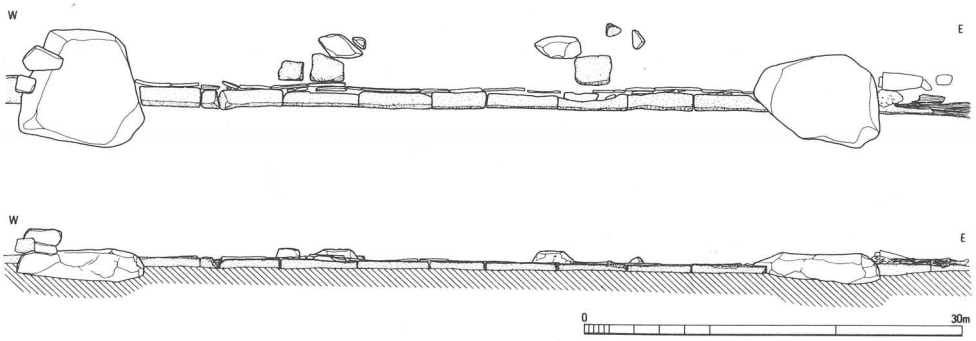


Fig. 22　西僧房大房第７房南正面詳細図

１房は桁行20尺，梁行38尺の広さをもち，房内は南庇を前室，身舎を中室，北庇の西半を後室とし，北庇東半は吹放しとなって小子房・付属屋への通路になる。最も広い中室は西半部に床を張り，通路の土間を挟んで，東壁際に棚を設ける。

南正面は中間に柱がなく間口２間分全体の礎石間に幅が狭い凝灰岩切石の地覆石（幅約 15 cm，長さ 50～60 cm）をならべ（Fig. 22），内側に平瓦１枚または２枚を立てて添え，その上に木製の地覆を置いている（西第６房に地覆断片の焼損材が遺存する。Fig. 23）。地覆の上には柱間を３等分する位置に角間柱を立てたと考えられる。後にこの位置の地覆石の内側を少し欠き取って幅のせまい扁平な野面石を立てている。野面石の内側に小型の凝灰岩をおいたところもあり（西僧房第３・５・７房），中の間の地覆石の内側に沿って瓦片や塼を敷いたところもある（第３・４房）。これは間柱の見込幅を内側で大きくして中の間の地覆幅もひろげ，ここを扉口に改め，両脇間は連子窓としたものと思われる。当初も地覆が通っていたから，恐らく中の間は開放，両脇の間は格子を立てた程度で吹放しに近いものであったろう。

房　境　壁　房境は梁行４間とも土壁で間仕切る。土壁を受ける地覆は礎石間に平瓦を組んでつくる珍らしい手法で，のちに改修されたところもある。（PL. 26 対向頁図面）

当初の地覆形式は礎石間の床面に幅約 60 cm，深さ約 25 cm の溝を掘り，10 cm 厚程に土を入れて瓦片を約 20 cm 間隔の２列に敷く。これを台にして平瓦の長辺を横に，凸面を外側に向けて平行に２列立て並べて側壁をつくり，内側に平瓦片を積み重ね，幅約 25 cm，高さ約 15 cm の地覆座を作り，両側の土を埋め戻す。床面からの瓦地覆の出は 5～6 cm で，土壁は両脇に立つ平瓦の内側に納まって，壁厚は約 18 cm である。

後世の修理を受けたところは床面の嵩上げによって瓦地覆が床面下にかくれるため，当初の瓦地覆を覆うかたちで，半截平瓦２枚を熨斗積みにしたもので，西４房の両側房境に良く残存する。第３房との房境の熨斗積み瓦地覆は梁行中央柱礎石の上にのって柱面まで達しており，この状況から中央柱の南北幅は９寸程であったと推定される。第７・８房境では身舎柱の周囲の瓦地覆の上に野面石がのっており，第６・７房境の背面側柱では礎石の上に野面石がのっていて，６・７房は建立後天禄焼失までの間に床面のかさ上げだけでなく柱根の朽損などの破損が進み，支柱を添えたり，根継を

Fig. 23　西僧房大房第６房南正面地覆焼損材

したりして大規模な修理工事を行っている。

前室と中室境の正面入側柱間は中の間8尺，脇の間6尺の三間にわかれる。三間とも瓦の地覆であり，脇の間は房境と同寸であるが，中の間は地覆の幅が広く27～30cmである。西6房中の間の東方礎石上に東西17cm，南北11cmの長方形断面で高さ27cm程の炭化材が遺存した。この炭化材の形状と，瓦地覆幅との関係から，中の間柱は角柱で断面はやや五平であったと考えられ，梁行中央間と同寸のものであったろう。また，この礎石上から東側の脇の間にかけて長さ約50cm，高さ約25cm，厚さ18cmの焼壁がもとの位置に残され，脇の間は全体が土壁か，連子窓・腰土壁であったことがわかる。

中の間の瓦地覆の床面からのたち上りは脇の間3cmほどに対して約8cmほどあり，中の間の方が高い。また，瓦地覆の側壁瓦の内側には，柱心から約50cmの位置に平積瓦と上端を揃えて凝灰岩（西7房）や玉石（西6房）を据えている。これは扉口の方立柱を直接立てたものと考えられるので，地覆は両側から方立柱をはさんで瓦地覆の上におき，方立柱の間で楣・方立・蹴放を組んだものと思われる。方立柱を6寸角ほどとすると扉口の内法幅は約4尺だったことになる。

中・後室境

中室と後室境は桁行の中央に柱を立てて1房を2間とする。礎石が比較的小さく東西に長いので，やはり五平の角柱であったと考えられる。西の間は土壁，東の間では中央柱から7尺の位置にも礎石があり，ここにも柱を立て東脇の3尺を土壁，西方7尺間を扉口とする。この部分の当初の瓦地覆は中室南面と同様に扉口の幅を広くするが，床面嵩上げに伴って，瓦地覆上に玉石や凝灰岩あるいは平瓦を重ねており，第6房の扉口では瓦地覆を撤去して塼を並べ，特に西端の塼は南北方向に置いて方立柱および地覆を受けるように改造している。

7房の中柱礎石上にのる瓦は柱の両側を挟むようなかたちで置かれ，その間隔が約30cmであり，また，礎石も他と比較して小振りで東西方向を長手に使っていることなどから，扉口両側の柱は前記の他の間仕切柱と同じ五平の角柱と考えられる。

各房背面西の間の後室は東面の通路側南寄りに開口部を設ける。後室は特に後の改修が著しいが，当初形式を最も良く残す第3房では，身舎背面中央柱心から北約1mの位置に径20cm程の小礎石を据え，その北側は瓦地覆で土壁とし，南側には地覆を設けていないので開放としていたと思われる。第4房の開口部は旧中柱礎石は残らないが，礎石の位置から北に40cmほど当初の壁土が残る。また，床面嵩上げに際して開口部の間口を4尺ほどに広げたために，凝灰岩礎石やその北に続く野面石地覆が旧壁土上にのっている。第5・6房では開口部に瓦片を敷いたり，野面石・凝灰岩を並べていて後の補修が大きい。

後室北側の間仕切は，第3房に瓦地覆が残る。他の間仕切壁と同形式であるが，幅が約半分になり，側に立つ平瓦の内法寸法で3寸である。第1・2房では瓦地覆の抜取り痕が溝状になって，同形式であったと認められる。第4房以下は当初の瓦地覆の痕跡をとどめず，柱間の中央と柱寄りに偏平な玉石を据えており，その上に木製の地覆を置いていたと思われる。このような状況から，後室北面の当初の間仕切りは土壁ではなく簡単に格子を立てたようなものであったと思われるが，房によって当初から開口部としたところもあったかもしれない。

中室床張り

大房の中室は西半分を床張りとし，床束石およびその抜取穴を残す。この状況は東僧房でも同様である。この床は建物の構造とはつながらず，別個に床面に据付けたもので，当初の束石配置は，もっとも残りの良い第6房によると，西・南・北壁側では壁心から約1.5尺離れ，東

は部屋の中央よりやや東に寄った位置にあり，束を南北4間，東西2間に割りつける。ただし，正面扉口を踏みこんだ部分は床を張らずに土間のままとする。

束石は凝灰岩切石・塼・玉石の三種類があるが，塼と玉石は土間床面の嵩上げのときに補われたもので下に当初の凝灰岩束石が残るところもある。当初の束石の大きさは方 15cm（5寸）位で，後補の凝灰岩束石はこれより大きく形が不揃いであるが，枘穴のあるものと棚の束石を転用したものもある。東第1房では束石の据付掘形（1辺30～40cm，深さ10cmほど）を検出した。

西第4・6房では床面嵩上げ後も床がほぼ当初の状態を保つが，西第3・5房では扉口の踏込みを2.5尺ほどに縮め，壁側では壁面に近接させ，東側も土間側に1尺ほど拡げて，床張り部分を拡大している。西第3房の束受け塼の東側2個の上面には各々中央に約20×10cmの焼残りが認められ，床束の寸法がほぼ明らかである。

前室床張り　前室は，当初全体に土間であったが，後に両脇に床を張ったところが多い。いずれも建物には取付けずに置床状にしたものである。第3・4房では左脇に南北2間6尺，東西1間4尺に小野面石や塼が配置されている（ただし，第3房の北側と第4房の東北隅束石は礎石抜取りのため欠失）。また，第3房前室の右手にも西北隅束受けと思われる塼があり，第5房においても，左手の西南隅（玉石）と右手の西南隅（凝灰岩）に束石がある。

束石の材質は玉石，塼，凝灰岩が使用されて，改修後の仕事であることは明らかであるが，大房創建時は前面が開放に近い状況であり，前身の束石も検出されなかったので前室に床を張ったのは，南面に扉口を設けて整備したのちのことと思われる。また，床張りの状況も各房一律ではなく，房ごとにそれぞれ行なったことが，束石の残存状況から窺える。

中　室　棚　大房中室の正面入側通りの扉口内の右手に房境壁に寄せて，間口3間，奥行1間の棚を設ける。床張りと同様に後の補修が多く，西第7房では当初の棚柱礎石（棚柱石）が完存している。

西第7房の棚柱石は平面正方形ないしやや長方形の凝灰岩切石で，長辺21～22cm，短辺18～19cm，中央に方6cm，深さ3cmの枘穴がある。棚石の配置は間口3間，奥行1間，平面規模は枘穴心々間隔で，間口両脇間各1.65m（5.55尺），中の間1.58m（5.3尺），奥行98.5cm（3.3尺）である。前室境・房境・後室境壁心からは，それぞれ約42cm，28cm，66cm離れた独立の棚があったと推定される。なお，東北隅の棚柱石上に塼が重なり，補修のあとを認めることができる。

西第5房の棚柱石は表側（西）に不整形な凝灰岩切石，奥（東）に自然石を用い，平面の大きさは間口4.65m（15.6尺），奥行92cm（3.1尺）で，西第7房よりやや小さく，棚柱石の形状も不揃いである。この棚背後の房境壁は，地覆瓦が，床面嵩上げ土の上に据えられているので，棚は壁とともに全面的に改修されたことを示している。なお，この房の床束石の一つに西第7房棚柱石と同様の枘穴をもつものがあり，これは当初の棚柱石を転用したものと考えられる。

他の房の棚柱石は塼と凝灰岩切石を混用して，明らかに後の補修のもので，遺存状況もあまりよくない。東大房も中室の東壁寄りに西大房と同様の棚を設けた痕跡を第1房に認められるが，第2房以下は削平を受けて痕跡を残さない。

床面の焼土層からは，土師器・須恵器・黒色土器・施釉陶器・灰釉陶器・中国製磁器・ガラス玉・金属製品・小金銅仏残欠等が出土した。特に土器類は棚柱石周辺と室隅に集中し，僧房焼失時に棚から落下した状態で数点ずつ重って出土し，僧房内の生活の様相を窺わせる。

iv 付　属　屋

大房と小子房の間は側柱間11.45m（38.5尺）の間隔があり，各房単位に中庭を区画する。付属屋は各大房後室の北に，西背面を房境柱筋と揃えて建つ南北棟の建物で，規模は桁行3間，梁行1間，柱間寸法は，桁行・梁行とも8尺等間である。北側面では中央に柱を立てて梁間を2間に分けているが，大房に面した南面には中央柱の礎石痕跡がない。

間仕切

間仕切は，最も遺存状態の良い第3房によると，西背面は瓦地覆で，半截平瓦2枚を2列に並べたもので，大房軒下の1間も含めて4間とも土壁と推定される。屋内は北2間を1間ずつ間仕切る瓦地覆があり，南間を開放とする。東側面は南と北1間が開放で，中の間は北柱寄りに3尺程の開口部を設けたものと考えられる。

付属屋は中世の池沼で不明のところも多いが，内部の間仕切の様相は房によって異なっていたことがわかる。第4房では南2間を1間ずつに間仕切り，東側の一間のうち北寄りに開口を設け，付属屋東面柱通りで大房軒下をも仕切って部屋に使用した。第5房では東面南端間の南方が開口となるらしく，ここでは妻側中央に束石状の石があり，大房背面柱通りにも付属屋の東面柱筋内側に小野面石が2個並び，中間に束石風のものがあるので，後に床を張ったかもしれない。第6房では南側面の両脇に礎石際に野面石があって扉口の方立柱を立てたようなかまえがあり，後の支柱かもしれない。大房軒下は東側に野面石列があるのに対し，西側は石列などがなく，ここでは大房軒下と付属屋は西の7房側から使われたような状況である。第7房の大房軒下も東側に石列があり，西は開放に近く，各房とも大房以上に使い勝手に応じて改修している。

雨落溝

雨落溝は付属屋の東側にあり，南端で東に折れて大房の雨落溝と連なる。玉石を側石とし，溝幅は30～35cmで，第5房では50cmに拡がる。また，第7房では南半部は後世の攪乱でわからないが，北半部では幅1.5mに拡げ底に玉石を敷いて，石敷状につくる。溝底は第4・6房は平瓦片を敷き，第5房では小礫敷きとする。溝の深さは付属屋，大房側の側石で8～9cm，中庭側の側石は1段低く4～5cmである。溝底は北側に傾斜し，付属屋の東北で西に約50度の角度で折れ，約1.5mほどで，小子房の床下を木樋暗渠で通して小子房北側溝に通じる。

付属屋および大房側柱心から雨落溝側石の出は，それぞれ約1.0m，2.2mである。

付属屋建設時の礎石高は大房よりも15cmほど低いが，大房と同様に床面嵩上げ工事を行い，部分的には旧礎石上に新たに礎石を重ね，間仕切も全面的に改造している。第5房の前室では，（PL.35 対向図面）床面から約7～8cm下に瓦片を敷きつめた前身の床面があり，西側柱筋では平瓦を横に立て並べて土留めとして，内外に段差を設け5cmほど床を高くする。東側柱筋では土留め平瓦はなく，瓦片敷きを側柱筋で止める。瓦片敷の東西幅は約2.6mで，西側の平瓦の土留めは壁下の瓦地覆として外面だけ造ったものとみることができる。

東側柱心から約60cm外側は東面を揃えて南北方向に玉石（一部凝灰岩切石）を1列に並べた葛石がある。葛石上面高さは瓦片敷面より5cmほど低く，側柱筋から外に水切り勾配をつけている。瓦片敷きは南側面で切れる。葛石は北に延びるが，南は，南側面の柱筋に揃えてとまる。葛石から外側20～35cmに，ちょうど後の雨落溝側石の下にあたる位置では，葛石上端より10cmほど低く，瓦片と凝灰岩片を敷き，第1期の雨落溝としていたようである。第2期には葛石の上部から東にかけて屋内の瓦片敷きの高さまで土で埋めて，新たに素掘りの雨落溝を設け，さらに盛土して設けた玉石溝は3期目の雨落溝である。

他の付属屋にも小トレンチを設けて前身床面調査を行った結果，第３房では南の間にも同様の瓦片敷きがあり，第４房では瓦片敷きがなく，東側柱筋に礫を敷並べた地覆を検出した。

付属屋が当初から大房に取付いていたかどうか確認していないが，第３房で設けた小トレンチでは，付属屋東側柱筋に小瓦片を南北に一列並べた室内外の見切りがあり，また，各房付属屋の南妻は北妻のように梁間を２分する中柱を設けていないことから，付属屋は建設当初から大房北面の軒下を取込んで利用していたものと思われる。

付属屋の西側には，雨落溝はなく，側柱筋から約80cm 西側に外面を揃えた玉石一列の葛石があり，大房の北雨落溝はこの葛石で止めている。

屋　　根　付属屋の屋根は南北棟の切妻造りか，東側に主排水溝があるので，東に傾斜した片流れ屋根の可能性がある。雨落溝の中心までを軒の出とすると付属屋東側の軒の出は４尺となる。

なお，東僧房では大房土壇築造後に北方付属屋部分の土壇を築いていることを確認している。これが施工上の手順なのか，付属屋が大房創建時より遅れて増設されたものか明確ではない。多少の時期差があっても大きく遅れることはないと考えられる。

ｖ　小　　子　　房

小子房は大房の後方に並び建つ桁行18間，梁間２間の東西棟建物で，柱間寸法は桁行10尺等間，梁行７尺等間である。桁行２間を大房の一房分とセットにして使う。各房は桁行１間ずつ２室に間仕切り，西室の東寄りに南の中庭から北側溝排水暗渠を通す。大房と同様に床面嵩上げによる大改造を受け，改造の際に間仕切を変更している。

発掘調査は西僧房の小子房について行い，昭和49年に第３房の一部と第７房を，昭和53年に第１房東側面及び第３～第５房を検出した。第４房から第７房は中世の沼池のためにかなり削平されていたが，他は焼土，木炭等が厚く堆積して，床面の遺存状況は良好であった。

礎石は，第７房の２個と第６房の１個が残るほか，すべて抜取られているが，直径 1.1m，深さ 50cm ほどの礎石抜取穴と根固石が残る。残存礎石の大きさは長径 70cm，短径 50cm ほどの花崗岩自然石で長手を南北方向に用いたもの２個と凝灰岩切石１個である。

瓦 地 覆　小子房の創建時の間仕切は，大房と同様に瓦地覆を用いている。瓦地覆は幅が約 15cm と約 20cm のところがあり，大房と同様に狭いところは壁，広いところは開口部と考える。各房境と房内中央柱筋の北柱間，各房北面東の間は土壁で，各柱間の中央に凝灰岩切石または玉石を瓦地覆側壁内に据えて間柱を立てた壁面となる。地覆幅が広い開口部は各房の北面西の間と，房内中央柱筋の南柱間であり，北面西の間では柱間10尺を３等分する位置に，室内南柱間では柱間７尺の中央に玉石や凝灰岩切石を据えて，方立柱を立て，北面では中央間を，室境では南端の半間を扉口としていたと思われる。

南側面では，第３房と第７房の東の間で瓦地覆を検出した。後の改造を受け当初の状況は分らないが，各房西方に付属屋があるので東の間が扉口，西の間が土壁であった可能性が大きい。

小子房床面は全面を嵩上げし，それに伴って間仕切を大きく変更している。改造の方法も房によって異なる。室境は北半のみ壁で仕切り，南柱間を開放とする点では各房共通であるが，北面の柱間は第３房では東の間の東端３分の１間に扉口を設けて，他は土壁とし，第４房西の間では，扉口の礎石に新しい礎石を重ね，前期と同じ形式で改造している。

南面間仕切は第３房東の間では，北面と同様に，東端３分の１を扉口とし，第７房東の間は

西3分の1間に扉口を設けたらしい痕跡を残す。

房境や房内室境，北面の土壁は火災を被った状態で高さ 5cm 程残存する。壁厚は約 15cm で前期のような間柱はなく，壁心には約 40cm 間隔に，縦小舞痕跡が炭化状に残存していた。

各房中庭の排水は小子房西の間内に木樋暗渠を通して，小子房北側溝に排水されていた。木樋は底板のみ残存し，幅約 18cm，厚約 8cm で，上面の中央幅約 12cm が高く，両側各 3cm 幅ほどが低くなっている状況から，側板を組み合せた形式と推定される。第3房では，床面嵩上げ工事に伴って側板部に平瓦を積上げて側壁を補足している。さらに，廃絶前にはすでに暗渠内に瓦片，礫を詰めて盲暗渠として，背面軒下部は丸瓦を利用した暗渠に変えていた。 **木樋暗渠**

北側溝は堰板を木杭でとめた側壁をもち，改修を受けている。前期の側溝は小子房北側柱心から南側壁まで約 1.45m，溝幅は 50cm，深さは 40cm ほどである。後に溝全体を北側に 10cm ほど，位置をずらし，改修後の堰板は長さ 6m 前後で丸太や割材の杭でとめている。 **側　溝**

東妻側溝は北半が堰板溝で，小子房東側中央部で十字廊南側溝の延長部と連なる。溝全体は北側溝と同様に当初よりも東に寄せて拡幅され，当初の溝は幅約 40cm，側柱心から溝側壁まで 1.35m，拡幅後の溝は 50cm，側柱から溝側壁まで 1.50m である。東妻側溝の堰板は北半部のみで，南半部は素掘り溝になり，北半と同様に東へ寄せて幅をひろげる改修が行われている。

南側溝は小子房南面全体に引通されずに，各房付属屋部分で途切れて，小子房内の暗渠に通じる。小子房の東端房と，第3房で幅 30～50cm，深さ 20cm の素掘り雨落溝が検出され，小子房南側柱から溝心まで約 1.2m である。

このように，北側溝と南側溝では側柱からの出が大きく異なる理由は，堰板溝と素掘り溝を使いわけていることからみると北半部の堰板溝は小子房の雨落溝としてよりも主排水溝として小子房の軒の出とは無関係に決められたと思われる。また，小子房の梁間（14尺）から考えても，南側溝の出（4尺）を軒の出とみた方が妥当であろう。

E 食　　堂（PL. 20 PLAN 6～8, 11）

i 概　　要

食堂は，長和の『縁起』によれば「長14丈，広5丈4尺5寸，柱高2丈5寸」で，九間四面の平面をなし，屋根は東屋（寄棟造）であった。また扉口は，正面に九戸，背面に三戸あり，左右両袖には脇門が設けられていたといわれる。この食堂は天禄4年の火災で焼失したが，その後別当増祐によって再建されたとされ，『巡礼私記』に再建食堂は九間四面，瓦葺であったと記されている。食堂の位置については，『今昔物語集』に記された堂塔の順序から講堂の北にあったと推定されている。しかし，この再建の食堂がいつ頃失なわれたかは明らかでない。昭和44年に食堂の東西基壇地覆石の一部が発見されたのを皮切りに，翌年には，正面階段部分，北面西寄りの基壇地覆石および玉石敷の雨落溝の一部が発見され，部分的ではあるが，基壇と周辺の状況が明らかとなった。更に昭和49年の調査で，食堂西面の基壇地覆石，玉石敷の犬走りおよび雨落溝を検出したのを始め，食堂の西側柱列の礎石下地業と礎石抜取り跡を検出し，一部では礎石根固め石も残存した。これらによって食堂の柱間寸法は梁行身舎 14.5 尺庇 12.5 尺，桁行全長は 140 尺と推定され，長和の『縁起』にいう当初の食堂の平面寸法とほとんど一致することが明らかとなった。『縁起』によると天禄4年に火災焼失ののち，寛弘2年

(1005) に再建されており，このときに比定できる屋瓦も数は少ないが出土しているので，食堂は十字廊とともに再建されたものと思われるが，検出した遺構からは再建を直接裏付ける資料は得られていない。

ii　基壇の規模と築成方法

基壇規模　食堂基壇を現地表面下約 80cm で検出した。後世の削平を受けて，基壇外装は凝灰岩地覆石が部分的に残っているにすぎない。地覆石は上面が摩滅した状態で，南面中央の石階位置，基壇西面北寄り，北面西寄りおよび南面東端に残存していた。東面では地覆石をすべて抜き取ったため，基壇の東西長は正確には明らかでない。南面中央の石階の南北軸を中心に折り返すと地覆石外側間で約 47.4m (160尺) となる。南北幅は，地覆石外面間で約 21.8m (74尺) である。地覆石の寸法は，長さ 0.7～1.2m，幅 25～28cm，厚さ約 18cm である。上面は摩滅し，羽目石との仕口はみあたらず，北面地覆石の前面から 15cm ほどの風触差から羽目石が当っていたことがわかる。

基壇周囲には，玉石敷の犬走りと雨落溝がある。発掘した範囲では，基壇北面や東面は残存状態が悪く，正面石階部や西面中央部は残りが良い。犬走りの幅は北面 95cm，西面 85cm，東面は側溝の玉石抜取り跡を残すだけで犬走りは削平されているが，90cm 前後と推定される。雨落溝は犬走り葛石を内側の側石とし溝底には玉石を 3 列に敷き詰めている。溝幅は西面で約 55cm，南・北面約 50cm，深さは犬走り側約 10cm，外側 5cm ほどで，各面ともおよそ一定下ている。なお，東面では東僧房との間の側溝西肩に沿って，6m ほどの範囲で食堂の垂木落下痕跡を検出した。痕跡は一列でほぼ角穴，ピッチは 30～36cm である。

石　　階　南面中央部には幅 3.80m，出 70cm の石階を設けている。石階内部にも地覆石を引通して，これに上面を揃えて石階地覆石を付け加える。耳石受けの枘穴はないが，かなり摩滅しているので消滅した可能性が大きい。石階地覆石幅は基壇地覆石より大きく，東・西側面で 35cm，前面で 25～30cm である。前面地覆石は南側ほど摩耗著しく，前面が一様に欠失しており，当初は南側の玉石に接して石階前面の地覆石幅は側面と同じ 35cm であったと思われる。したがって，石階は出が 75cm (2尺5寸)，踏面 25cm 3 段と推定され，蹴上げを踏面と等しいとすると，基壇高さは地覆の見付け高さ 10cm ほどを加えて約 85cm となる。

基壇西面の南寄りにも石階の取付いた痕跡がある。基壇の西側では玉石溝と犬走りの石敷の遺存状態がかなり良いが，基壇中央部では，地覆石南から北へ 3m から 6.5m にかけての約 3.5m の間には，雨落溝の東側壁から基壇前面にかけて犬走り上面より高く土層が残るにもかかわらず，犬走りの玉石敷きを据えた痕跡はない。この位置はちょうど食堂の南面庇通りと一致し，また，僧房基壇南面への通路にもあたるところから，ここに石階が設けられたものと思われる。この石階の南半部には，基壇地覆石の抜取り跡が残る。

南面中央石階の場合は，雨落溝側石の北側に石階前面の地覆石を添えているが，この石階では雨落溝側石の抜取りの痕跡が 1 箇所にしかなく，遺構面の高さからみても，石階前面の地覆石 (段石) が直接雨落溝側壁を兼ねていたものと推定される。

西面石階の規模は犬走り石敷間のあきを石階幅として 3.5m，出は犬走り幅と等しく約 0.85m と推定される。東面の石階についても西面と対称の位置に同規模・同形式のものがあったものと考えられるが，基壇地覆石や犬走りとともに痕跡を留めていない。

南面中央階段から南方の講堂へ通じる玉石敷の参道が検出された。この参道の幅は食堂前面および講堂背面の石階幅と同じ3.8mである。参道石敷面は中央から東・西両側に向って緩く水垂れ勾配をつけ，両側の見切り石は縦長の玉石を揃えて丁寧な仕事をしている。

iv　礎石据付け地業

基壇は，掘込地業をせずに，周辺と一連の整地土上に築成されている。すなわち，黒灰色粘土の地山上に厚さ5～20cmの整地土を層状に積重ねている。この整地土は最大で約60cmほど残存するが，地覆石は地山面から約40cmの高さに据えられ，基壇内は主として粘土，粘質土を厚く盛土して版築を施してはいないようである（Fig. 24)。

基壇西端で，食堂西側柱の礎石据付け掘形を4個所検出した。掘形は1辺約2.5mの隅丸方形で北西隅と中央柱の掘形中央部には，礎石抜取り穴があり，北隅柱掘形には根固め石が残っている。掘形の残存深さは，北西隅で50cmほどで，中央掘形はこれより30cmほど浅い。掘形埋土はいずれも粗砂で，中央掘形には底部に瓦片を混入している。

これらの掘形配置から，食堂の梁行柱間寸法は身舎2間各14.5尺，庇12.5尺，梁行全長54尺，側柱心からの基壇の出は四面等しく10尺と推定できる。したがって，基壇東西長が160尺であるから，食堂桁行全長は140尺となり，桁行柱間は11間で，中央間を十字廊に合わせて15尺，他柱間を12.5尺等間に復原することができる。

F　十　字　廊（PL. 41・42, PLAN 6・7)

i　概　要

十字廊は，長和の『縁起』によれば，「東西14丈1尺，南北5丈6尺，柱高9尺2寸」で食殿ともよばれた。

『縁起』の，他の建物の寸法記載法と異なり，「長」「広」とはいわずに「東西」「南北」となっていることと，その名称からみても十字形であると考えられる。また十字廊は食殿とよばれていたことから食堂の近くにあり，特に天禄4年の火災が食殿の堂童子宿所から出火し，食堂・講堂・三面僧房・四面廊・中門・大門と南へ延焼していることから食堂の背後にあったと推定されていた。

昭和53年の発掘調査で，十字廊の西半部を検出して位置や規模が明らかになった。すなわ

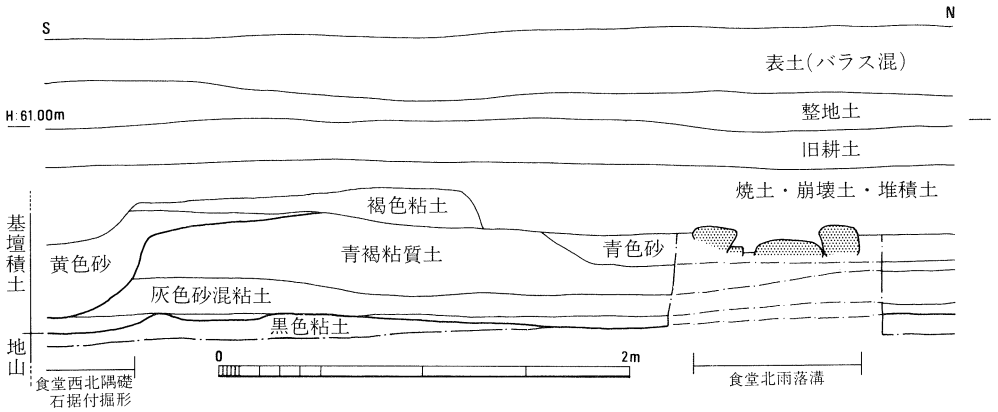


Fig. 24　食堂西妻柱通北隅土層図

ち，十字廊は食堂の背後にあり，桁行11間，梁行２間の東西棟の中央間前面に３間，背後に１間の張り出しのある平面十字形の建物であり，食堂とは桁行全長が等しく，両妻の柱筋を揃えて並び建つ。

また，十字廊の創建の時期は，基壇西北に掘られた井戸が廃絶した奈良時代後半頃に求められ，天禄４年の火災で焼亡した後再建されなかったことも明らかになった。

ii　基　　壇

基壇は，後世にかなり削平されており，礎石はすべて抜取られていた。また基壇上に大きい土壙が掘られるなど部分的に攪乱されている。

基壇基底部は掘込み地業をせず，青灰色粘質土の地山をほぼ水平にならした上に，茶褐色の山土を主に30cmほど積上げ，その上に凝灰岩細片混りの黄褐色砂質土を置いて築成される。基壇外装は凝灰岩の羽目石を直接地面に立て並べて葛石を受ける形式であったと推定される。羽目石の寸法は，長さ55cm前後，厚さ15cmほどで，上端はかなり摩滅していたが，底からの高さ20～50cm程遺存する。基壇南面の羽目石の一部には底に平瓦を敷き，羽目石の高さを調節している。羽目石底部は南面を北面より約20cm低く据えている。なお用途不明の仕口をもつ羽目石が北面入隅脇に３個，南面入隅端に１個あり，建設時，または修理時の転用材と考えられる。

発掘区東寄りで基壇南側・北側の羽目石列はそれぞれ南と北に直角に折曲り，基壇は南と北に十字形に張出すことがわかった。張出しの取付き部分は，南では後に南面雨落溝を東西に引通したために破壊されているが，北では北面入隅端の羽目石に張出し部の羽目石を組合わせている。十字廊基壇と食堂基壇との取り付き部分は発掘区外となるが，羽目石の西側に幅約30cmの犬走りとその西に幅約30cmの玉石敷の雨落溝があり，基壇は食堂基壇に直接取付き，犬走りと雨落溝は食堂背面にまわっていたものと考えられる。

基壇規模　東西廊の基壇規模は羽目石外面間で南北8.2m，東西は伽藍中軸線で折返して約43.9mと推定される。南北廊は基壇推定幅7.8mで，南端は食堂基壇に接続し，東西廊と食堂の基壇間は約9.2mと推定される。北面の南北廊張出しの状況は，一部南北トレンチを入れたところでは後世の攪乱で不明である。

東西廊の側溝は基壇羽目石が内側の側壁を兼ね，外方の側壁は南側溝は堰板を，西側溝は玉石を用いている。北側溝は攪乱のため残っていないが西側溝と同形式であったと思われる。南側溝は西にのびて西小子房の雨落溝に続き，西小子房東妻で北へ折曲る。中央では十字廊南北廊基壇を横断して東へ続く。南側溝の堰板護岸は改修後の形式で，当初は西側溝と同じ玉石の側壁であったと思われる。

iii　平　面　形　式

十字廊の礎石はすべて抜取られて，基壇面は削平を受けているが，十字廊の西半の桁行４間，梁行２間分の東西廊礎石据付け掘形と根固め石を検出し，また，南北廊は西側柱３間分の礎石据付け掘形を検出した。掘形は，隅丸方形で一辺長1.0～1.5m，残存深さ0.3～0.6mである。基壇土をいったん積上げた後に掘られており，掘形最下層に瓦片を混ぜて粘質土と砂質土を互層に３層突固め，さらに人頭大の川原石を根固め石に用いている。東西廊西側柱の掘形

は，食堂の西側柱掘形と揃えていることから東西長は食堂と同じ約 41.5m（140尺）と推定される。伽藍中軸に対し対称な平面とすれば，東西廊は，桁行11間，梁間2間で，南北廊は南に3間，北に1間張出した平面十字形の建物が復原できる。柱間寸法は，東西廊桁行が中央間15尺，順次14尺，13尺となり脇3間を12尺とする。梁行は17尺で2間，各8尺5寸。南北廊は南側桁行3間10尺等間であるから，『縁起』に記載された南北5丈6尺から計算すると北に9尺1間のびることになる。基壇の出は，東西廊・南北廊とも桁行で5.5尺，東西廊西妻で4.5尺である。柱間の地覆などは削られて残存しない。

iv　十字廊周辺の遺構

十字廊基壇の西北隅と一部重複して基壇築成以前の井戸 SE(A)（PLAN 6）がある。井戸の周辺には東西約 5.0m，南北約 4.5m の方形の木枠で囲んだ砂利敷きの遺構がある。井戸の枠組は十字廊の建設に伴なって西方に約3mほど移されたために，旧井戸の北辺と東辺の砂利敷と木枠だけが遺存する。木枠は北辺3枚，東辺2枚で板の長さは東辺北側が 2.9m，他は等しく 2.1m，成 25cm，厚 1.8～3.0cm である。隅は板を留にして，直径 10cm ほどの丸太を四半分欠取り，木枠の隅を外側から押え，中間の板の合わせ目には外側に木杭を打って押えている。東側の木枠の中央には，内側に1辺 90cm の枡をつくり，その西側板から西方に木製の樋（長さ 150cm，幅 25cm，深さ 29cm）が通じている。樋の途中に水を堰止めるために使用されたと思われる木材（高さ 55cm，幅 25cm，厚さ 15cm）がある。　**SE(A)**

十字廊創建以前の井戸 SE(B) の掘形（PLAN 6，PL 63）は1辺約6m，深さ2mで，この掘形の西側に重複して新たに東西 6.3m，南北 3.5m，深さ 2m の掘形が掘られており，西寄りに内径東西 1.95m，南北 2m の井戸枠3段が残る。　**SE(B)**

なお，十字廊の北側には土壙や近世の東西溝・上水施設がある。上水施設は直径約 60cm の円形井戸から孟宗竹の導水管を北に引き，導水管の接合点，分岐点に木製ジョイントを用い，分岐導水管には木樋を用いている。そして十字廊の南北廊基壇北端の雨落溝推定位置を東方に引通している。

十字廊の創建時期は，基壇西北部にある井戸が基壇築成にあたって西側に造り替えられており，その時期が出土遺物から奈良時代中頃と推定されるので，この頃と考えられる。

また廃絶の時期については，長和の『縁起』に，天禄4年焼失ののち別当増祐によって寛弘6年に再建されたと伝えるが，遺構の状況からは，十字廊がもとのままに再建されたことを示す証拠は得られなかった。

G　経楼・鐘楼（PL. 44・45，PLAN 9・12）

i　概　　要

経楼および鐘楼の位置は，南都諸大寺の伽藍配置から推察して，講堂付近に対称の位置にあると考えられ，回廊内に置く見解と回廊外に置く見解とがあった。また東西の楼のどちらを経楼あるいは鐘楼にあてるかについても意見が分かれている。長和の『縁起』によると，経楼は長さ3丈7尺，広さ2丈5尺，柱高3丈で俗に大経楼と呼ばれ，鐘楼もこれと同規模で，ともに天禄4年の火災に焼失した。この時鐘も失われたので勝光寺の鐘をひきとって西の岡の上に懸け，その後長和5年に興福寺別院の建法寺の鐘をひきとり，鐘楼跡に仮屋を建ててこれを懸

けたといわれる。ちなみに，「薬師寺伽藍古図」（江戸時代，復原的に描いたものか）では東側が経蔵，西側が鐘楼になっており，「薬師寺絵図」（江戸時代初期）では西側に鐘楼（東側の経蔵位置は欠損）を描いている。また，延宝２年（1674）正月に郡山本町九条屋貞慶尼が施主になって鐘楼を金堂の東の位置に移し建てたとされる（『縁起国史』，『薬師寺志』）。これが，昭和46年まで金堂の東にあったもので，復興事業にともなって，鐘楼は現在地（経楼跡）に移建された。したがって，鐘楼が西側で，経楼が東側に位置したものと考えておきたい。

ii　経　　楼

経楼跡の発掘調査は，昭和44年に回廊内の東北部分に数本のトレンチを入れ調査したが，遺構は見あたらず，経楼は回廊外にあると推定された。昭和45年，北面東回廊の北側で，東西に並ぶ凝灰岩切石列を検出し，翌46年に再度この地点を中心にトレンチを拡げた結果，経楼基壇の南辺と東北隅，北面階段位置などを確認した。この結果，経楼基壇の規模は，東西約 15.9 m，南北約 19.7 m で，南北中央に階段がある。昭和49年に検出した鐘楼基壇では，西面にも石階があるので，経楼の石階も四方に付くと考えられる。

経楼基壇は水田耕作面下約 40 cm で基壇南辺の凝灰岩切石列と南・北辺基壇中央石階裏込め土壇および基壇東北隅土壇を検出した。南面の凝灰岩切石は長さ 40～70 cm，幅 15～20 cm で，その形状から羽目石を直接地上に据えたと思われる。羽目石の上面はいずれも摩滅し，東へ行くほど成が低くなる。西端では北に折れて西南隅が明らかになり，西面の羽目石の木口が延びて南面の羽目石がこれに突付けとなる。東南隅は後世の攪乱で凝灰岩細片となっているが基壇は北へ折れ曲る。基壇南面中央部分は，羽目石が通らず，基壇土が張出しており，ここが階段と考えられる。張出し部の寸法は両脇羽目石のあきが 2.87 m，裏込土の張出しは約 0.7 m である。北面中央の石階裏込土の張出しは，東半部を検出し，東西幅は，南辺と同幅と推定される。出は約 1.4 m で南辺と異なり，基壇羽目石の据付け面の高さは南辺と北辺でほぼ同じであるから，石階の出も同寸と考えられ，後述の鐘楼石階と同規模・同形式に考えて差支えない。張出し中央部を一部南北にたち割ったところ，北辺に接して約 20 cm 下層に幅 45 cm，深さ 25 cm の東西溝を検出したが，経楼基壇とは関係する遺構ではない。北面石階の東側に続いて土壇の立ち上りが約 5 cm ほど認められた。南面羽目石外面から北面基壇土立上りまでの距離は約 19.5 m で，この立ち上りを羽目石抜取り痕跡とすれば，鐘楼基壇とほぼ等しくなる。経楼基壇の東北隅の確認のために設けたトレンチでは基壇土の立ち上りが南へ折れ曲り，基壇規模が明らかになった。

iii　鐘　　楼

鐘楼は昭和49年の発掘調査で経楼と対称位置に基壇の約３分の２を検出した。遺構面は水田耕作面下約 95 cm（海抜 60.7 m ほど）である。基壇は削平を受けていたが，基壇北面から西面にかけて羽目石を抜取った溝状の痕跡と北面および西面に石階の地覆石と段石の一部が残存していた。鐘楼跡一帯の地山は上層が厚さ 10～40 cm ほどの砂層で下層に粘土層がある。鐘楼跡から僧房にかけてはこの地山上に数層に分けて 40～50 cm ほどの厚さに盛土整地を行っている。

基壇内の土壇は基壇周辺よりわずか 10～20 cm ほどの高さが残るだけであるが，基壇内は比較的堅くつき固められ，また発掘区東辺の礎石位置と推定されるところでは，その下層の盛土の中に凝灰岩片や玉石を混ぜて固めた程度の地業が認められる。

北面石階の大きさは地覆石外面間で幅約 3.10m，出は約 0.75m である。地覆石の形状は，長さ 65～75cm，幅約 30cm，高さ約 25cm で，旧地表面下に 10cm ほど埋められ，見付成は 15cm ほどと推定される。前面の地覆石は 4 個で石階幅いっぱいに引通し，東・西側面地覆石をその内側に据えている。前面地覆石の両端には，耳石受けの枘穴（15～18cm 角，深さ 3～4cm）があり，枘穴中心間の石階幅は 2.67m（9尺）である。基壇北面の羽目石はその抜取り穴の状況からみると，石階内部には通らないで，石階側面地覆石に突付けとなる。2段目の段石が東端に 1 個体残る。上面の摩耗が著しくもとの高さは分らない。この段石は地覆石と同様に幅 30cm であるから，石階の出（約 75cm）は 3 段で，踏面幅は 25cm となる。

西面石階は北面石階より規模が大きく，地覆外面間約 4.15m（14尺）である。地覆石の形状も北面石階よりやや大きく，長さ 1.0～1.3m，幅 35～40cm，成約 25cm である。地覆石の配列も北面と異なって，両側面地覆石を石階前面まで延ばし，その内方に 3 個の前面地覆石を据えている。耳石受けの枘穴は北側には無いが，南側地覆石の枘穴（1 辺約 15cm 角）は地覆石の中心よりやや内方に寄り，枘穴心から地覆石南側面まで約 20cm である。したがって，枘穴心を耳石の中心とすると，耳石心々間は約 3.7m（12.5尺）となる。二段目の段石が地覆石と 7cm ほど重なって 3 本分残存する。破損著しいが，長さ 80cm 前後，幅約 35cm，成 20cm 以上で，断面寸法は地覆石と同じと推定される。踏面幅は約 30cm（1 尺）で，石階の出は 3 段 3 尺となる。段石の蹴上げと葛石のせいを地覆石と同じ約 25cm とし，地覆石の見付成を北面石階と同様に 15cm ほどとれば，石階高さ，すなわち基壇高は約 90cm（3 尺）で石階の出と等しくなる。

基壇西面羽目石の抜取り痕跡は，幅約 80cm，深さ 5～15cm ほどで北面より幅広く，石階内部を溝状に貫通しており，石階羽目石はこの溝中に 20cm ほど突き出た形になっているが，やはり地覆石を置かず羽目石を直接立てたのではないかと思われる。石階内部の溝状中には凝灰岩破片が多く混入している。北面石階では基壇地覆を引通していないこと，および石階形式が北面と西面で異なることなどからみて，基壇西面には当初石階がなく，のちに増設した可能性もある。

石階が基壇四辺の中央にあるものとして基壇規模を復原すると羽目石外面で，東西 15.68m（53尺），南北 19.25m（65尺）となる。

東辺では 2 個所に基壇積土中に玉石や凝灰岩片の入るところがあり，西面石階耳石の通りとも揃うので，桁行中央間柱間寸法を西面石階耳石心々と同じに考えると12.5尺となる。長和の『縁起』に見える長さ 3 丈 7 尺，広さ 2 丈 5 尺の記事と併せて考えると，桁行 3 間，梁行 2 間で各々12.5尺等間と考えられる。そうすれば，基壇の出は 4 方等しく14.5尺となり，手先の出の多い組物を用いたことが認められ屋根は入母屋造りとしたと思われる。

H 回　　廊（PL. 46～49，PLAN 12・15・17・18・21・22）

既往の調査

回廊については，昭和29年の中門の発掘調査[17]では中門東側の取付き部を検出し，基壇幅から，回廊が複廊であることを指摘した。その後杉山信三氏等による回廊東面・同東北隅・同西南入隅部の発掘調査が行われた[18]。昭和43年は東塔東方と回廊東北隅に，昭和44年には西南入隅

17）『日本建築学会論文集』第49号，昭和30年 3 月，「薬師寺南大門及び中門の発掘」大岡実・村田治郎・福山敏男・浅野清。本報告書「付章」。

18）『仏教芸術』74号，「薬師寺の最近の発掘調査」杉山信三，松下正司，阿部義平。

部に発掘区が設けた。昭和43年の調査では複廊の礎石抜取り穴を検出し，薬師寺回廊が複廊であったことを確定的なものにした。昭和43・44年の調査では，それぞれ凝灰岩切石による基壇外装を検出している。この発掘調査によって，回廊は桁行14尺，梁行各10尺の複廊で，回廊の基壇外装は凝灰岩切石であったことが知られた。その後，昭和49年宮上茂隆氏は薬師寺創建当初は，回廊を単廊で計画したこと，複廊が東西回廊で柱間数が異なる点を想定している。[19] さらに，奈良国立文化財研究所が昭和49年に西面回廊の一部を調査したが，後世の池状遺構で基壇は確壊されていて遺構は確認できなかった。[20] ついで昭和57年度の中門の発掘調査[21]では，中門東に取付く複廊の礎石抜取り穴を検出した。回廊での発掘調査面積は小範囲にとどまったが，中門脇の複廊の桁行柱間は14尺の完数とはならず，12尺強と考えられ，中門の取付き部分で柱間を調整していると考えられた。

昭和60年の回廊の発掘調査[22]では，基壇・柱間寸法などの復原資料を得るとともに回廊の方位が伽藍中軸線に対して振れているかどうかを知るために南面回廊・回廊東北隅・回廊西南隅の計3個所で発掘調査を行った。まず従来の成果から想定できる複廊の礎石抜取り穴や基壇外装を検出した。この成果に加えて，注目されたのは，複廊に先行する単廊の礎石抜取り穴を検出したことである。また，回廊内の水を排水する暗渠施設を検出したこと，中世以降の小規模建物と考えられる礎石および礎石抜取り穴を検出したことなども成果と考えられよう。

i　回廊地区の検出遺構

三発掘区で検出しているので，発掘区毎に遺構の状況を報告する。

1.　東南隅地区　東院堂の西南部では，昭和30年代後半まで存続していた近世の池のため，回廊基壇南辺は大きく破壊されている。遺構検出面より上層は細砂層が厚く推積し，何度も水が流れて冠水したことを示す。

検出した回廊は単廊及び複廊の礎石据付け穴・礎石抜取り穴，複廊基壇である。単廊の遺構面を複廊の基壇土が覆うことや，単廊の礎石抜取り穴を複廊の礎石抜取り穴が切ることから単廊の礎石抜取り穴が先行することが明らかである。南面回廊のうち中門に近い部分や東面回廊の両側では複廊基壇の凝灰岩基壇外装を検出した。

単　　廊　単廊の礎石抜取り穴は径 0.8～1m の円形の穴で，礎石据付け穴と重複している。礎石据付け穴は底部がわずかに認められたが，単廊の礎石抜取り穴の埋土と単廊基壇から複廊基壇へ拡幅した際の基壇土は同一と認められ，単廊の礎石抜取りと基壇拡幅の工事は同時に進行している。基壇を梁行方向に断割り，断面土層を観察すると，単廊の基壇は地山をいったん削ってほぼ水平にならし，その上に，基壇土を積上げている。この基壇の両端はなだらかに下っていて，単廊は基壇外装工事に至らなかったと判断できる。

中門の東約15mほどのところで，地山直上に東西に並ぶ瓦敷列を3.5m検出した。(Fig. 25) その東3.5mのトレンチでも同様の瓦敷列を検出し，瓦敷列は一部途切れるが，少なくとも延長7mある。単廊外側柱心から南へ2mほどの位置である。この瓦敷列は平瓦を主とし，丸瓦を一部含み，軒瓦も混在している。この瓦敷列の位置は，単廊基壇の南端に当るので基壇築成

---

19)『日本建築学会論文報告集』第209号，昭和48年7月，「薬師寺仏門・回廊の規模形態と造営事情」宮上茂隆。この論文の中で氏は回廊は当初単廊で計画したことを指摘している。

20)『昭和49年度平城宮跡発掘調査概報』p. 37。

21)『昭和57年度平城宮跡発掘調査概報』p. 65。

22)『昭和59年度平城宮跡発掘調査概報』p. 60。

時の見切りか，伽藍造営時の最初の地割計画に関連するものと考えられるが，いずれかは断定はできない。

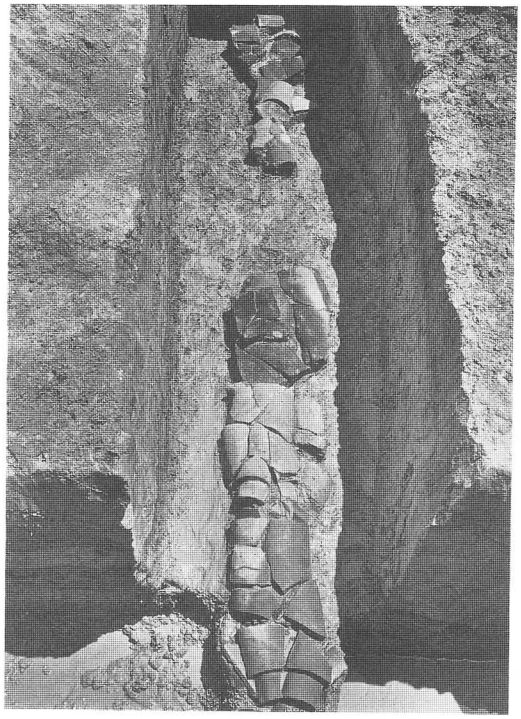
複　廊

複廊の礎石抜取り穴は2時期あり，上層は30～40cmの円形穴，下層は長さ1m，幅60～70cmの長円形であり，これに礎石据付け穴が重複している。据付穴は1.5mの隅丸方形である。この礎石抜取穴を断割って観察したところ，穴の底部には瓦を敷いている。東南隅区の南中央部では，中世の瓦溜が基壇上面を破壊していて，単廊・複廊の礎石抜取穴などは検出できなかった。複廊の基壇は，単廊基壇として造成された土壇を両側に拡幅して築いている。

基壇外装の遺存状況の良好なところを観察すると，(Fig. 26) 長さ80cmほどの長方形断面の凝灰岩の上に，凝灰岩の崩れた塊がある。長方形断面の石は羽目石，塊状の石は葛石と考えて，基壇外装は地覆石を用いず地面に羽目石を直接据えて立ち上げ，葛石を置いたと考えられ，昭和47年の東塔東方での回廊発掘調査の所見と一致する。中門脇では地覆石を据えていて，回廊での所見と異なる。中門脇の回廊基壇外装の地覆石がどこまで東へ延びるかは不明である。回廊基壇の羽目石はどの石もほぼ一様に前面の上角が欠損し，外側へやや傾いているものの，原位置は保持している。羽目石は復原すると縦45cm・横20cmほどの長方形断面である。葛石は砕けていて当初の位置，大きさを知ることはできない。東南隅区では複廊礎石位置の中間に小掘立柱穴6個所を検出した。いずれも30cm前後の小さい穴で複廊を建設する際の足場穴と考えられる。

足　場　穴

東塔の南辺付近では回廊基壇上面に凝灰岩切石2個所を検出している。複廊棟通りにあたる位置のものは，棟通りが連子窓・下方腰壁と想定されるので，壁下の地覆石と考えられる。切石の一つの大きさは，長さ110cm，幅45cm，厚さ15cmほどである。また，その東方にある約方1mにわたって広がる凝灰岩は，上面がほぼ水平に残り，布目地が認められるので，複廊の床面は凝灰岩切石で舗装されていたと考えられる。東塔の東の回廊の西側では玉石が南北に



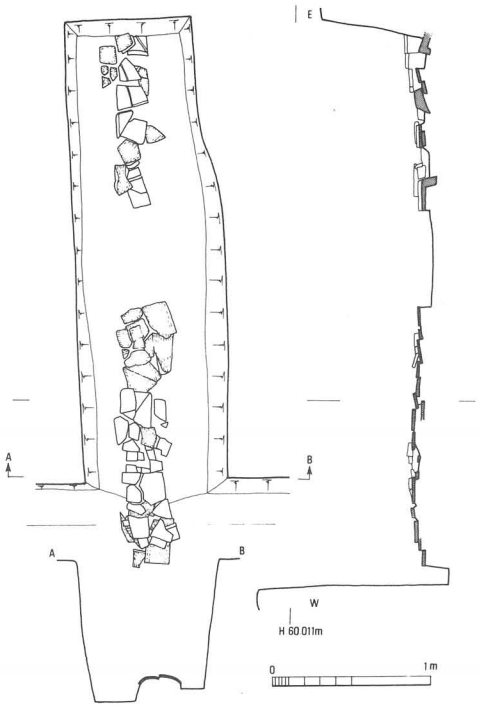


Fig. 25 瓦　敷　列

面を揃えて並び，のこりがよいが，回廊の東側では玉石が散乱した状態であった。東塔東方以外では雨落溝外側の玉石列は検出できず，いずれも後世の破壊をうけている。検出した東面回廊の東西両側の雨落溝は，基壇外装を雨落溝の内側縁石とし，雨落溝の外側を玉石列とするものである。この玉石列は東塔東でも検出している。薬師寺における既発掘調査の所見から，当初は外側縁石も凝灰岩であったと推定されるので，玉石列の雨落溝は後補であろう。中門東脇は基壇面が高く残るので，中門基壇に向って回廊基壇が高くなっていたと考えられる。

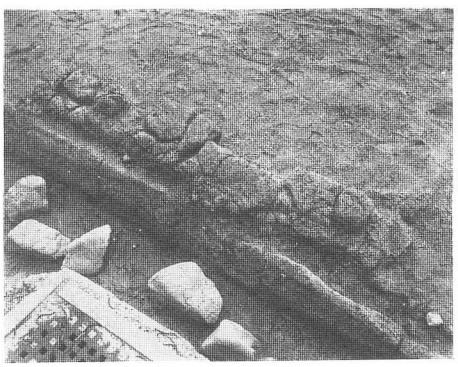
中門東方では複廊の桁行の柱筋に揃えて，各柱位置のほぼ中間の位置に，礎石及び礎石抜取穴を検出した。柱間寸法は約 4m，4間分ある。この遺構は再々建回廊か，あるいは奈良時代の複廊礎石をも利用した桁行柱間寸法の狭い納経所風の建物かもしれない。後述する西南隅区で検出した暗渠と対応する位置に，東南隅でも近世まで流れていた幅流れていた幅約 80cm の東西水路がある。設置時期はわからないが，この位置に暗渠があり，同じ位置に重複して近世まで水路があったと考えられる。

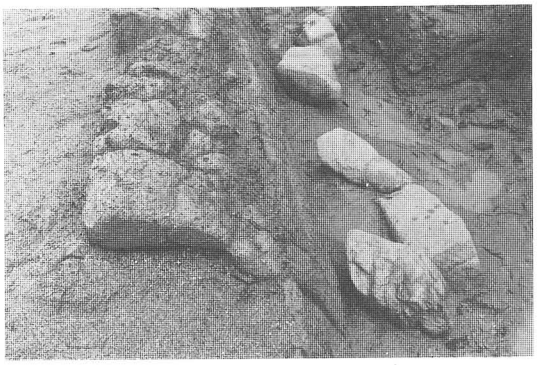
複廊の礎石抜取穴は 2 時期認められて，上層の抜取穴埋土には瓦片を含み，締まり具合がゆるい。これには17世紀初頭の時期の土器片を含むので，2 回目に礎石を抜取ったのは17世紀初頭と考えられる。

2.　東北隅地区　東北隅の発掘区は，昭和43年に杉山信三氏によって発掘調査が行われ，その際複廊の基壇外装や礎石抜取穴 4 ヶ所を検出している。このとき，基壇の東外側では軒瓦が並んで落下した状況を発見した。東北隅区は，全体に削平されていて遺構ののこりが悪いが，昭和60年の発掘調査では単廊・複廊の礎石抜取穴や基壇拡幅の痕跡などを検出した。東北隅区

単　　廊

では，単廊の礎石抜取穴 7 個所を確認したが，入隅部から南 1 間目の西側柱位置では，後世の攪乱により破壊されている。単廊東西列の礎石の中心線は複廊の中心線と揃っているのは南面





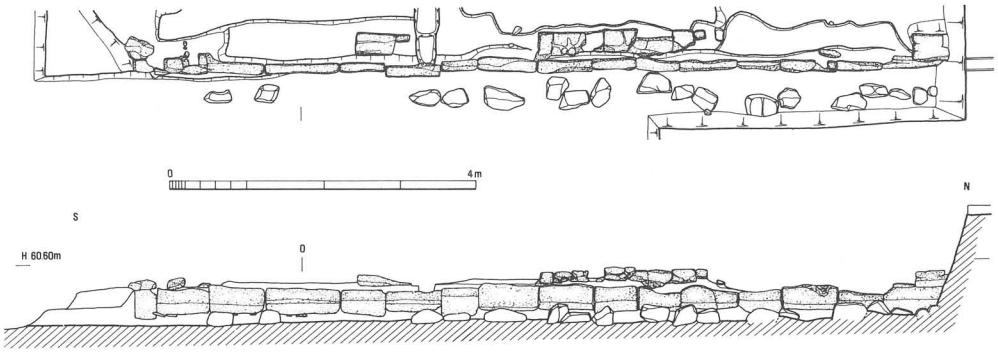


Fig. 26　東面複廊東側基壇外装

回廊と同じである。礎石抜取り穴は深さ5cmほどしかのこらず，いずれも浅い。

複廊礎石抜取り穴は深い所で10cmほどと極めて浅く，入隅部では抜取り穴を検出できなかった。東北隅区で検出した凝灰岩基壇外装は長さ60cmの凝灰岩で，この石の下に玉石を根石として並べている。今回検出できた基壇外装は，東南隅区にのこる当初の基壇外装と比較して観察すると，当初の羽目石を横にして再利用していると判断できるので，当初の基壇外装が荒廃したために修復していると推定できる。基壇の東外側では瓦堆積を幅50cmで検出した。昭和43年に発見した軒瓦落下状況から東へ続く部分である。複廊の基壇入隅の内側で基壇外に接する位置には，L字型の溝があり，溝埋土には瓦を多く含んでいた。この溝は後世の回廊に伴う溝と思われるが，性格は不明である。東北隅区でも単廊用に造成した基壇の両側に拡幅して版築を行い，複廊基壇を造成していることを確認した。 **複　廊**

3.　西南隅地区　この発掘区の南辺，西辺には後世の池・溝があり，基壇の南と西の基壇外装を破壊していた。しかし回廊基壇は遺存していて，単廊礎石抜取り穴，複廊礎石抜取り穴，複廊建設の足場穴，暗渠排水路などを検出した。単廊礎石抜取り穴は4個所検出した。西南回廊の西側柱通りの礎石抜取穴は検出できず，西側の礎石抜取り穴は削平されてしまっている。西南隅の南側は，近年まで存続していた池によって削り取られている。単廊基壇用の土壇も確認してあり，基壇外装までの工程には至っていない。 **単　廊**

複廊の礎石抜取穴は南の池で破壊された1ヶ所を除いて想定される位置13個所すべてで検出した。この礎石抜取り穴の底部には瓦を敷いている。複廊の礎石位置のちょうど中間に，約30cmの方形の小掘立柱穴を検出した。複廊を建設する際の足場穴と考えられる。南面棟通り西端柱間には凝灰岩切石の地覆石があるが，上部を削平されていて石の底がわずかに2～3cmほどしかのこっていない。切石の大きさは東南隅区の棟通り地覆石と同じである。複廊基壇はここでも単廊として築造した土壇を両側に拡幅している。西南隅発掘区の東南で，南面回廊基壇外装に使われた凝灰岩列を，長さ3.5mほどにわたって検出した。北側の基壇外装は昭和44年の調査でも検出している。石は大小があり，原位置を保持しているとは思われず，東北隅と同様に基壇外装を積み替えていると考えるのが妥当であろう。西南隅入隅の角に回廊を南北に横切る幅1mほどの溝があり，溝の内側には凝灰岩片や粉状の凝灰岩が散在していた。溝の肩内側には幅5cmほどの小溝があり，羽目石にあたる凝灰岩切石の痕跡で，この溝はもと凝灰岩 **複　廊**

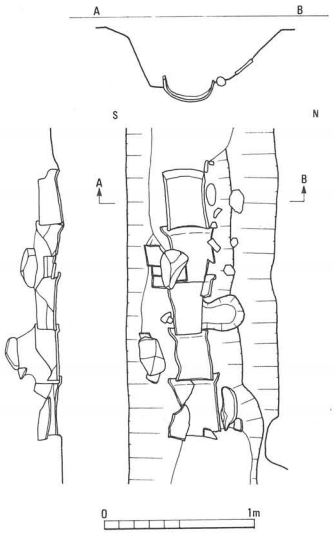


Fig. 27　回廊西南隅区・瓦製暗渠

石組暗渠であり，凝灰岩を抜き取っていると考えられる。暗渠跡の溝埋土から出土した遺物の年代から，この溝は11世紀頃まで存続していた。

瓦製土管　西南隅入隅の角にはさらに幅1mの東西溝がある。瓦製土管を使用した暗渠施設(Fig. 27)で，12世紀頃と推定でき，この頃にも西面回廊が存続していたのであろう。

ii　検出遺構のまとめ

三発掘区での成果をまとめて回廊の遺構についての所見を整理する。

1.　単廊　金堂の発掘調査成果に基づいて単位尺0.297mとすると，単廊は桁行12.5尺梁行12.5尺である。ただし中門取付部は柱間寸法が異なる。中門桁行17尺，5間として，単廊の中門取付部は2間が15.5尺を2つ割りするか，取付部1間が3尺ほどととくに狭くなるなどの案が考えられるが明らかでない。当初計画では中門が5間でない場合や，桁行12.5尺で5間の場合などを想定することができ，中門取り付き部の当初計画は様々な場合が考えられ，断定できない[23]。単廊南面回廊は取付部1間と隅部を除いて柱間数12間である。東南隅区・東北隅区での柱位置を計測して割付けると，東面単廊は隅部を除いて柱間数28間となる。北面単廊の心は，想定講堂中心から東へ59.25mであり，これを200尺と考え講堂を『縁起』によって桁行126尺とすると，北面単廊は片側143.25尺となって柱間12.5尺では完数で割り付けができない。講堂取付き部分で柱間を狭くするなど調節して割り付け，計画したのであろう。

単廊の基壇盛土は，縁がゆるく傾斜して下ることから基壇外装までは完成していなかった。また単廊礎石は1つも残っておらず，抜き取られている。なお，中門東脇や北面回廊の一部に複廊基壇幅より0.8～1.2mほど狭くなる位置に凝灰岩列があるが，天禄の複廊焼失後のもので，中世以降の土壇端部である。

2.　複廊　複廊は単位尺0.299mとして南面複廊では桁行13.5尺東面複廊では桁行13.7尺と考えるのが遺構によく一致する。ただし中門に取り付く東2間の柱間は3.82m，3.55mとばらつきがあるが，12尺に割り付けたと考えるのがよい。複廊基壇は，単廊の基壇を伽藍外側に約1.5m，内側に約2mと両側に拡幅している。南面複廊・北面複廊は単廊の棟通り位置を変えずに建設している。しかし，東面複廊は南面複廊の隅に合わせて北へ折れ曲っているようで，東面複廊の柱筋は下層の単廊の棟通りや柱筋に揃えてはいない。

複廊の基壇幅は基壇外装外面で計ると，東面回廊では約10.3mあり，中門東の南面回廊では約9.80mでやや狭い。基壇幅を34尺とすれば梁行2間10尺であるから基壇の出は7尺となる。東面複廊は東南隅と東北隅を引き通すと，南北中軸線に対して北で東へ0°25′15″振れ，南面複廊は東南隅と西南隅を引き通すと東で北へ0°28′39″振れる。南面複廊は中門東では東で0°17′38″，中門西では南へ0°52′53″と振れが異なり，中門西方の方が振れが大きい。複廊は，その礎石を一度据え替えていて，2回の抜取りがある。上層の抜取穴の埋土は汚れた土で，中世末から近世初期の土器片が出土するから，17世紀初頭まで複廊礎石が据えられていたと考えられる。

iii　回廊の造営と変遷

『縁起』によれば，回廊は天禄4年に火災に遭い，その後再建している。単廊の基壇を複廊に拡幅した部分の基壇土には，遺物をほとんど含まず，焼土も皆無である。もし単廊が羅災し

23)『日本建築学会大会学術講演梗概集』1985，10月，「平城京薬師寺の造営についての一考察」上野邦一。

たとすれば，基壇拡幅の土の中に焼土などが混入すると考えられる。また複廊基壇上面には焼土は存在せず，複廊基壇外側の雨落溝を埋めるように焼土層がある。この所見から天禄の火災に遭ったのは複廊であることが分かる。単廊が完成後天禄年間までの間に単廊から複廊に建替えたとすると，それは大掛りな全面的建替であり，こうした変更は，回廊の火災とか倒壊などが契機にする思われるが，そのような羅災の記録はない。とすれば単廊を複廊に建替える契機が見当らず，単廊が完成したかどうかが問題となろう。基壇断面の観察から，単廊基壇は外装に至るまでは工事は進展していない。また単廊礎石の抜取りと単廊基壇から複廊基壇への拡幅作業は同時に進行している。そこで，単廊基壇の築成が礎石を据えるところまで進行した段階で，計画変更されて複廊にしたと考えられる。三発掘区とも単廊の遺構を検出しているので，単廊建設は四面とも一斉に進行していたと判断できる。

複廊・東面回廊を，東南隅区・東北隅区で柱位置を計測し，1尺を0.299mとして柱間13.7尺で割付けると，隅部を除いて25間となり，東塔東側の既発掘調査成果とも矛盾はない。この柱間数は『縁起』の東面回廊の柱間数24間と一致せず，同『縁起』の西面回廊の柱間数25間に一致する。東面回廊を全面発掘していないので，東面回廊の柱間数は確定できないが，今回の発掘調査から見る限りでは，東面・西面ともに25間と考えた方がよい。『縁起』には東面回廊に開く楽門については記載がなく，その存在は推定の域をでないが，東面回廊に門の存在を想定すれば，西面回廊より柱間数は少なくなることも考えられる[24]が決め手がなく，25間と想定しておきたい。複廊・南面回廊の桁行柱間数は，中門の取付部と隅部を除いて10間，中門の東西両側で20間となり，『縁起』の記載と一致する。

天禄の火災以後の再建回廊については，『縁起』の再建の記録を手掛りにして論じられてきた。中門東の中世以降の建物や，西南隅区の12世紀頃の暗渠施設は，中世以後の回廊の状況を考える手懸りになるが，不明な点は残る。礎石は17世紀ごろまで大部分が存続していたらしいが，その後取り去ってしまい，江戸時代の絵図や大和名所図絵には描かれていない。

I　講　　堂 (PL. 43 PLAN 13)

昭和43・44年に創建講堂基壇の東縁にあたる現講堂の東10mほどの地点で発掘区を設け，基壇東南隅と東北隅とを検出した[25]。これによって基壇の南北長さがわかり，想定中軸線を折り返して基壇の東西長さもほぼ確定する。基壇規模は東西43.2m，南北22.5mである。東南隅区の発掘区では幅1mの犬走り，幅0.4mの玉石の雨落溝を検出した。基壇上では礎石抜取穴を検出したが，後世の攪乱も大きく，抜き取り穴から柱位置を決定するのは困難である。建物規模は東西37.1m前後，南北16.3m前後で，桁行は12.5尺×9間，梁行は10.5尺×4間で四周に裳階6.25尺と考えることができる。この柱間は『縁起』に記載される講堂規模，桁行126尺，梁行54.5尺とほぼ一致する。

なお，講堂側面中央に北面複廊が取付くことを確認した。

---

24) 前掲宮上論文では複廊桁行を14尺と考えるので，東面回廊を24間と考えて論を展開している。

25)『薬師寺伽藍の発掘調査 1968～1971』昭和52年6月　近畿大学理工学部建築学科杉山研究室　鳥羽離宮跡調査研究所。

J　その他の遺構 (PLAN 3～5, PL. 58～63)

宝蔵建設に伴う事前調査，およびその後の伽藍整備に伴う志納所設置，摩利支天堂移築に際する調査は食堂と東僧房の北側で実施し，掘立柱建物，土壙井戸等を検出した。宝蔵建設に伴う調査地は，後に実施した志納所設置，摩利支天堂移転に伴う際の調査地と一部重複するので，ここで一括して述べることにしたい。この地域は，西半部に遺構が集中し，東半部はきわめて少なく，さらに東半部では後世の攪乱が著しい。東半部に見られる多くの土壙は土取りの穴と思われる。

SB 030 (PL. 59, PLAN 5)　SB 031 廃絶後，これとほぼ重複した位置に建てられた東西棟，4間以上 (12.0m 以上)×2間 (6.0m) の掘立柱建物である。柱間寸桁行・梁行ともに 3.0m (10尺) 等間である。西妻は発掘区外である。検出した5個の掘形に柱根 (径 0.3m) が残っていた。この地域の遺構検出面は暗灰色粘質土で，柱掘形の検出には難渋をきわめ，南側柱通り西端ではその輪郭が明確ではなかった。

SB 031 (PL. 59, PLAN 5)　調査区西端にある東西棟，5間以上 (9.9m 以上)×2間 (4.8m) の掘立柱建物である。建物東南部は後世の土壙によって攪乱されていた。柱間寸法は桁行・梁行ともに 2.4m (8.5尺) 等間である。西妻は発掘区外である。検出した掘形はほぼ正方形 (1辺 0.7～0.8m) で，検出した7個の掘形のすべてに柱根 (径 0.2～0.22m) が残っていた。

SK 032 (PL. 59, PLAN 5)　十字廊北方の土壙である。須恵器・土師器・円面硯が出土した。平城宮Ⅴ期に属する。

SA 033 (PL. 60-3, PLAN 5)　SB 031・032 の東にある掘立柱南北塀である。掘形を3間分 (7.7m) 検出したが，さらに南へ延びるものと思われる。柱間寸法は 2.56m (約8尺) である。掘形はほぼ正方形 (1辺 0.75～0.85m) で1個の掘形に柱根 (径 0.22m) が残っていた。

SB 034 (PL. 58-2, PLAN 5)　摩利支天堂移転予定地で検出した南北棟，4間以上 (7.05m 以上) ×3間 (6.2m) の西庇つき掘立柱建物。南妻柱の位置は確認できなかった。柱間寸法は，桁行 2.35m (8尺) 等間，梁行 2.06m (7尺) 等間である。3個の掘形に柱痕跡 (径 0.2m) を残す。

SB 035 (PL. 58-2, PLAN 5)　SB 034 廃絶後，ほぼ同じ位置に建てられた南北棟，3間以上 (5.4m 以上)×3間 (6.0m) 東庇つき掘立柱建物である。南妻柱の位置は確認できなかった。柱間寸法は，桁行 2.7m (9尺) 等間，梁行 2.0m (7尺) 等間である。4個の掘形に柱痕跡 (径 0.25m) を残している。

SE 036 (PLAN 5)　SA 033 の東 2m ほどのところにある井戸で北半分を検出した。直径 1.6m の穴を掘り，河原石や塼を積む井戸である。大部分が発掘区外にあるため，上面のみの発掘にとどめた。

SE 037 (PLAN 5)　1辺 1m，深さ 1.65m の正方形の土壙であるが，壁面はわずかな傾斜をもちほぼ垂直で底面が1辺 0.8m の広さをもつ状況から廃絶した井戸と思われる。埋土はほとんど暗灰色粘質土で，わずかに灰色粘土と砂質土が混在する。使用を止めた後，直ちに埋められたものである。埋土中には多量の瓦片が混入していた。軒瓦はすべて本薬師寺式であり，他の丸瓦や平瓦も大ぶり硬質で本薬師寺式軒瓦に伴うものと考えられる。このほかの出土遺物として奈良時代前半の土器類，多量の木片や削屑とともに出土した 233 点の木簡がある。出土した軒瓦や，木簡にみえる「霊亀2年」の年紀からみると，この井戸は薬師寺造営当初に設けら

霊亀二年銘木簡

れ，造営工事の進展とともに廃止したものと考えられる。この井戸は，平城京薬師寺の造営経過を考察にとって重要な遺構である。

SE 038 (PL. 58, PLAN 5)　SE 037 の東側には他に5基の井戸が近接して設けられていた。いずれも灰色粗砂まで掘りこみ，河原石や瓦を用いて築いたもので，出土の瓦，土器は12世紀から13世紀のものである。SE 038は，直径1.4m，深さ1.2mの穴を掘り，直径約30cmの河原石を四方において，その上に平瓦を平積みにした長方形の井戸である。内法は長辺 0.8m，短辺0.7m。瓦積みは0.4m残るのみである。底の中央に直径34cmの曲物側板を据える。

SE 039 (PL. 63, PLAN 5)　河原石積みの上部に瓦を平積みにした円形の井戸である。上縁部の内径0.95m，深さ1.25mあり，底の中央には曲物側板を据える。曲物側板の直径は30cmあるが，井戸の底が狭いため掘りきれず，曲物側板の高さは確認できなかった。

SE 040 (PL. 63, PLAN 5)　平瓦を小口積みにした円形の井戸，上方に向けて広がるが，崩壊が著しく，良好な部分でも 0.35m ある。底には曲物側板を2段に据えている。上段のものは直径42cm，高さ20cm，下段のものは直径40cm，高さ15cmある。

SE 041 (PL. 63, PLAN 5)　底部に直径20cmほどの河原石を方形におき，その上部に平瓦を平積みにした方形の井戸である。平面形はほぼ正方形であり，上縁では1辺0.7m，底部では1辺0.5mである。深さは1.15m。底に直径28cmの曲物側板を据えているが，井戸底が狭いため，曲物側板の高さを確認するにはいたらなかった。

SE 042 (PL. 63, PLAN 5)　1辺約1.4m，深さ0.8m以上の正方形の穴を掘り，平瓦を小口平積みにした井戸で，底の中央やや南寄りを掘り込んで，直径38cmの曲物の側板を据えている。瓦積みは，遺存状況の良好なところで高さ約0.4m残り，内法は1辺約0.9mである。底にのこる川原石は，瓦組みの上部に組んだものが転落したものである。

SK 043 (PL. 58, PLAN 5)　SE 042の南に据えられた土壙である。直径約1m，深さ0.7m。埋土中から土師器，瓦器とともに木簡が1点出土したが，墨痕を認めるにすぎなかった。

SK 044 (PL. 58, PLAN 5)　SK 043の東にある土壙である。直径1.6m，深さ0.7m。埋土中から土師器，瓦器が多量に出土している。

SE 046 (PLAN 3 PL. 59-2)　東地区西北で検出した井戸。井戸枠は残存せず，1辺1.4m，深さ1.5mの方形の穴のみである。底部に直径0.4m，深さ0.2mのくぼみがあるので曲物側板が据えられていたかもしれない。また，底に礫が散見されるので礫敷きの可能性もある。埋土中から，少量の土師器と瓦器が出土した。

SK 047 (PLAN 3)　発掘区東端近くで検出した土壙である。東西3.3m，南北2.1m，深さ0.6mの大きな土壙 SK 049 があり，この中でさらに2個の土壙を検出した。SK 047 は東の土壙で，東西1.3m，南北2 1m，深さ1.2mある。多量に出土した土師器や須恵器は奈良時代前半期のものである。

SE 048 (PLAN 3)　調査地区東南隅で検出した井戸で，直径4.2m，深さ2.3mの穴を掘り，直径約1.5mの円形，竪板組の井戸枠を設けている。埋土中から出土した土器類は土師器，黒色土器，白色土器，緑釉陶器など種類が多く，10世紀末頃の基準資料となる。

SK 051 (PLAN 5)　SK 044の南で検出した土壙である。不整形な長方形（約 2.2×2.0m，深さ0.3m）である。埋土中から，多量の土師器と瓦器が出土した。

3　本薬師寺と薬師寺の建築石材

古代建造物の建築様式や構造に関する研究は多くなされているが，建築部材である礎石等の材質についてはあまり研究されていないのが現状である。しかし，それらの岩石学的特徴から石材の採取地を限定できれば，当時の石材の移動や流通範囲を知る事が可能となる。今回は本薬師寺と薬師寺の礎石を主として，岩質の特徴から石材採取地等についての考察をすすめた。

i　本　薬　師　寺

1.　本堂跡　現存している礎石は，完形なものと破砕されたものを含めて観察可能なものは，20数個である。その他，基壇の羽目石に使用したと考えられるものが不完全ながら2個ある。

礎　　石　現存する礎石の大半は，中粒で弱片麻状もしくは片状構造を呈する角閃石黒雲母石英閃緑岩である。主要構成鉱物は，長石・角閃石・石英・黒雲母であり，磁鉄鉱もわずかに観察できる。長石の大半は，斜長石で透明感をもち5～7mm大のものが多く1cm大に及ぶものもある。不定形を示すが長柱状にちかいものが多い。カリ長石はわずかであるが，白色で斜長石より小さく5mm大程度である。石英は斜長石ほど透明感がなく白色半透明で数mm～5mm大程度で不定形を示す。角閃石は，自形性が強いのが特徴的である。全体に長柱形を示すものが多く，黒緑色でヘキ開が観察されるものが多く数mm～20mm大に及ぶものがある。黒雲母は全体に小さく数mm大のものがゴマ塩状に多数散在している。角閃石や斜長石の長軸は，ほぼ一定方向に規則性をもって配列する傾向が認められる。また，これらの礎石には，数センチから30cm以上にもおよぶ黒～黒緑色でレンズ状を呈する片理に平行に伸びた暗色包有岩である塩基性のゼノリスが多量に存在する特徴がある。ゼノリスは細粒の角閃石，黒雲母，輝石等の有色鉱物が多く密集したもので，岩石の成因を知る上でも重要なもので，産出地を推定する場合の大きな手懸りとなる。

礎石のなかには，石英閃緑岩より有色鉱物が多い（角閃石・輝石・カンラン石を含む）細粒の塩基性変成岩（変輝緑岩質の岩石）および変斑糲岩に属すると考えられるものも数個存在するが，地質構造的に，同一岩体であっても部分的に岩相変化を示すこともあり，石材の採取地を推定するには，これらの石材はほぼ同質のものと考えてもよい。

羽　目　石　基壇の羽目石に使用されたと考えられる岩石は，上記のものとまったく異なり，流紋岩質凝灰角礫岩であり，構成する礫は，白色のパミス，黒色の松脂岩礫（溶結凝灰岩），灰色～白色の流紋岩礫（角礫）である。これらの構成礫は2～3cm大におよぶものがある。また，鉱物として1mm程度の赤色のガーネット（ザクロ石）が認められる。岩石の保存状態は悪く全体が白色～黄色を呈し風化している。

西塔心礎　西塔跡で観察できるのは心礎のみである。岩質は中粒でやや優白質で弱片麻状を示す角閃石黒雲母石英閃緑岩である。構成鉱物は，長石，石英，角閃石とわずかに黒雲母が存在する。レンズ状を呈する塩基性ゼノリスは，やや丸みをおびているが，金堂跡礎石と岩質は同じである。

東塔礎石　東塔跡で観察できた礎石は15個である。大部分が土中に埋まっており，礎石上部のみの観察である。礎石の岩質はすべて細粒～中粒角閃石黒雲母石英閃緑岩（もしくは花崗閃緑岩）である。観察できる部分が不十分であるが弱片麻状構造が認められる。暗色包有岩である塩基性ゼノリ

スが観察できたのは，15個のうち12個であり，3個については存在の有無は確認できない。心礎の岩質は，中粒で弱片麻状の石英閃緑岩であり，長石・石英・角閃石・黒雲母より構成される。塩基性ゼノリスも見られ同様な特徴をもつ。

ii　薬　師　寺

1.　東塔　観察できたものは現存する礎石36個のうち32個で，その他，塔心礎と床石についても調査した。いずれも塔が建っているので観察できるのは，礎石の一部分で充分に特徴をとらえきれないものもある。礎石のうち細～中粒で弱片麻状構造を有する角閃石黒雲母石英閃緑岩でかつ，塩基性ゼノリスが認められたものは18個であった。その他，塩基性ゼノリスが観察できなかった細～中粒角閃石黒雲母花崗閃緑岩および石英閃緑岩は6個，細粒の閃緑岩は1個，細～中粒黒雲母角閃石花崗岩は3個，細～中粒黒雲母花崗岩は3個，アプライトは1個であった。心礎は優白質で，石英，長石が多く，黒雲母が含まれ，わずかに角閃石がみられる細～中粒黒雲母角閃石花崗岩である。床石はすべて流紋岩質凝灰角礫岩で，黒色の松脂岩（溶結凝灰岩）礫や白色のパミスが礫として観察できるが，流紋岩礫の有無については観察状態が悪くその存在は，確定するに至らなかった。　**礎　石**　**床　石**

2.　西塔　観察できたのは塔心礎のみである。この心礎の岩質は，中粒弱片麻状角閃石黒雲母石英閃緑岩である。有色鉱物はやや少ないが，そのうち角閃石はやや多く，長石と同様に長軸方向にほぼ一定に配列している。黒雲母はわずかに散在している程度である。また，塩基性ゼノリスは20～30cm大のものが多数みられた。　**西塔心礎**

3.　金堂　観察したのは床石の一部のみであった。これらはすべて流紋岩質凝灰角礫岩であり白色のパミス，黒色の松脂岩（溶結凝灰岩），白～灰色の流紋岩の礫を含むものであり東塔の床石と同質のものである。　**金堂床石**

上記以外では，中門跡の東の台石2個は，いずれも中粒弱片麻状角閃石黒雲母石英閃緑岩で塩基性ゼノリスを含有する。薬師寺では，礎石等比較的大形の建築用石材は，飛鳥地方の寺院建築石材と同質なものが多く使用されていることがわかった。また，東僧房の葛石など比較的小型の石材は，安山岩，黒雲母片麻岩，アプライト，溶結凝灰岩等多種類のものが利用されていた。一方，床石等はすべて同質の凝灰岩を使用している。

iii　石材の推定産出地

本薬師寺および薬師寺に使用している礎石の石材は，すべてがいわゆる領家複合岩類であった。領家帯は，西南日本における地質構造上，重要な地帯をなし，深成岩や変成岩が分布する地域で，長野県諏訪湖南方から，九州の国東半島まで幅約30～50kmをもつ細長い地帯である。奈良県付近においては，紀伊半島北部紀ノ川に沿った中央構造線を南限とし北はほぼ木津川から鈴鹿川にかけての地域に各種類の深成岩や変成岩が分布する。

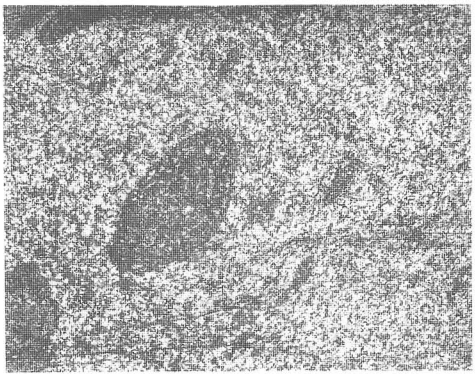


Fig. 28　岩石顕微鏡写真
（石英閃緑岩に含まれる塩基性シュリーレン）

古代建築部材として礎石などに使用された石材の採集地を推定するには，遺跡から出土

する岩石種の出現頻度と量から，使用されている場所付近に同種の岩石が分布しているかを調査する事が一般的方法である。

本薬師寺　本薬師寺に見られる石英閃緑岩は，1. 同種のものが飛鳥地方一帯の寺院礎石をはじめ，石造物や古墳の石室等に多く使用されている事，2. 同じ特徴を有する岩石が，薬師寺をはじめ平城宮跡および付近の寺院建築の礎石に使用されている。しかし，飛鳥地方で出土する量にくらべて奈良市域の寺院等で出土する量は，ごくわずかであり，むしろ，細～粗粒黒雲母花崗岩や縞状片麻岩等の他種類のものが圧倒的に多い。以上の2点から本薬師寺の石材の採集地は奈良県南部近辺と考えられる。文献および野外調査を実施した結果，奈良県南部における領家複合岩類の中では，竜門岳付近から多武峰付近にかけて分布する石英閃緑岩が，飛鳥地方の遺跡で出土する石材に酷似する事が判明した。この岩石は，中粒で全体が暗灰色を呈し，自形性の強い角閃石を含む事と，片理に平行に伸びるレンズ状を呈する暗色包有岩であるゼノリスを含む特徴をもつ。

また，石英閃緑岩ではないが，良く似た石として，黒雲母を多量に含む中粒花崗閃緑岩は，芦原付近に分布している。この岩石も塩基性ゼノリスを若干含んでおり，飛鳥地方における寺院礎石等に石材としていくらか採集された可能性があるが今回の調査では，確定するに至らなかった。この他，本薬師寺の本堂跡でわずかに見られた塩基性変成岩は，竜門岳の北西部にほぼ石英閃緑岩中に分布し，これらの岩石も石材として採集されたものと考えられる。以上のことから，本薬師寺をはじめ，明日香地方一帯で広く使用された石英閃緑岩は，竜門岳付近および付近の河川礫から採集されたと考える事ができる。

iv　ま　　と　　め

本薬師寺と薬師寺の礎石・心礎に共通する岩質は，中粒で弱片麻状ないし片状構造を有する角閃石黒雲母石英閃緑岩であり，特にこれらには塩基性のゼノリスが多数含まれている特徴を有することである。同様の岩質をもつ建築部材用石材として使用された例は，飛鳥地方では，山田寺・川原寺・檜隈寺・大官大寺等で，その他，奈良市内では，平城宮・薬師寺・唐招提寺等で，京都府では恭仁京等に見られる。これらと酷似した岩石は，奈良盆地東南部竜門岳から多武峰付近一帯にかけて分布する石英閃緑岩である。また，奈良市須川町付近にも良く似た岩石は分布しているが，風化に対して弱く石材としては適さないものである。

以上のことをまとめると，中粒弱片麻状角閃石黒雲母花崗閃緑岩～石英閃緑岩で塩基性ゼノリスを含有する岩石は，飛鳥地方で採取され当時の寺院等の建築石材としてよく使用したものであり，都が平城京に移る時比較的大形の建築用石材は，運搬して再使用したものと考えられる。しかし，遷都後も従来の採石場所である飛鳥地方の露頭から採取した可能性も残される。その後，新しい建築石材は，奈良市東部近辺に産するペグマタイト・縞状片麻岩・細粒～粗粒黒雲母花崗岩が採集された。また，両輝石安山岩等多種類の石材が利用される様になった。また，薬師寺の床石等に使用されている凝灰岩は，古墳時代～奈良時代を通していずれも二上山ドンズルボー付近に産する柔らかく加工の容易な流紋岩質凝灰角礫岩が採取されている。これに関しては，風化しやすい事と産地が近いので再使用された可能性は少ない。

〔参考文献〕 松下　進（1976）：近畿地方　朝倉書店，沓掛俊夫他（1974）：近畿地方領家帯中央部の地質と岩　地質見学案内　地学団体研究会京都支部，柴田秀賢（1971）：日本岩石誌　変成岩　深成岩。